

「現代中国語の使役構文の意味研究」  
Semantics of Causative Constructions in Mandarin Chinese

神奈川大学大学院外国語学研究科中国言語文化専攻／横山昌子

目次

|   |    |
|---|----|
| 序論  | 1  |
| 第1章 中国語の使役文の先行研究と本論の捉え方                   | 6  |
| 1.0 現代中国語の使役研究概観                          | 6  |
| 1.1 使役概念の観点からの研究                          | 7  |
| 1.1.1 范晓 (2000)                           | 7  |
| 1.1.2 熊仲儒 (2004)                          | 8  |
| 1.1.3 本論の捉え方                              | 9  |
| 1.2 “让”、“叫”、“使”構文、兼語文の先行研究                | 9  |
| 1.2.1 王力 (1985 [1943], 2002 [1943, 1944]) | 10 |
| 1.2.2 Chao (1968)                         | 11 |
| 1.2.3 朱德熙 (1982)                          | 12 |
| 1.2.4 温琳 (2008)                           | 13 |
| 1.2.5 本論の捉え方                              | 13 |
| 1.3 VR についての先行研究                          | 14 |
| 1.3.1 先駆的研究                               | 14 |
| 1.3.1.1 王力 (1985 [1943], 2002 [1944])     | 14 |
| 1.3.1.2 Chao (1968)                       | 15 |
| 1.3.2 VR についての生成文法による研究                   | 17 |
| 1.3.2.1 何元建 (2011) の分析                    | 17 |
| 1.3.2.2 Sybesma・沈阳 (2006) の分析             | 20 |
| 1.3.2.3 本論の捉え方                            | 22 |
| 1.4 “得”構文、“把”構文の研究                        | 23 |
| 1.4.1 李临定 (2011) の研究                      | 23 |
| 1.4.2 松村 (2011) の研究                       | 24 |
| 1.4.3 本論の捉え方                              | 24 |
| 1.5 本章の結び                                 | 25 |
| 第2章 分析理論－形式意味論の考え方と方法                     | 27 |
| 2.0 はじめに                                  | 27 |
| 2.1 形式意味論の基本的な考え方                         | 27 |
| 2.1.1 命題とは何か                              | 27 |

|                               |    |
|-------------------------------|----|
| 2.1.2 命題論理                    | 28 |
| 2.1.3 真理条件的意味論                | 28 |
| 2.1.4 述語論理                    | 29 |
| 2.1.5 構成性の原理                  | 30 |
| 2.2 形式意味論の方法                  | 30 |
| 2.2.1 形式意味論の枠組み               | 31 |
| 2.2.2 意味解釈とモデル                | 31 |
| 2.2.3 「可能世界」                  | 31 |
| 2.2.4 中国語の文を用いた意味解釈の実例        | 32 |
| 2.2.4.1 統語論                   | 32 |
| 2.2.4.2 翻訳                    | 33 |
| 2.2.4.3 意味解釈                  | 34 |
| 2.3 中国語の使役文のモデル理論による分析        | 36 |
| 2.3.1 述語論理による記述               | 36 |
| 2.3.2 モデル理論による意味解釈            | 36 |
| 2.4 本論における論理式                 | 40 |
| 2.4.1 論理式の拡張                  | 40 |
| 2.4.2 語用論的意味 — 「話題」「副話題」      | 41 |
| 2.4.2.1 統語構造と談話概念             | 42 |
| 2.4.2.2 使役の意味構造と談話概念          | 43 |
| 2.4.3 命題的意味 — 「意味役割」「時相」「着点」  | 44 |
| 2.4.3.1 意味役割                  | 45 |
| 2.4.3.2 時相                    | 47 |
| 2.4.3.3 「 $\gamma_1$ 」 — 意味役割 | 50 |
| 2.4.3.4 「 $\gamma_2$ 」 — 時相   | 51 |
| 2.4.3.5 「 $\gamma_3$ 」 — 着点   | 52 |
| 2.4.4 論理式のまとめ                 | 53 |
| 2.5. 本章の結び                    | 54 |
| 第3章 兼語構造と VR 構造を基盤とした使役文      | 56 |
| 3.0 はじめに                      | 56 |
| 3.1 兼語構造を基盤とした使役文             | 56 |
| 3.1.1 兼語構造の特徴                 | 56 |
| 3.1.1.1 二重機能的性質               | 56 |
| 3.1.1.2 単純使役義と多義使役義           | 57 |
| 3.1.2 多義使役兼語文                 | 57 |
| 3.1.2.1 兼語文の基本的意味構造           | 57 |

|                                  |     |
|----------------------------------|-----|
| 3.1.2.2 多義使役兼語文の論理分析             | 59  |
| 3.1.3 “让”、“叫”、“使”を用いた単純使役兼語文     | 60  |
| 3.1.3.1 使役を表す“叫”構文の意味構造          | 61  |
| 3.1.3.2 使役を表す“让”構文の意味構造          | 65  |
| 3.1.3.4 “使”構文の意味構造               | 66  |
| 3.1.4 まとめ                        | 68  |
| 3.2 VR を基盤とした使役文                 | 69  |
| 3.2.1 「VR+対象」の意味構造               | 70  |
| 3.2.1.1 使役性を持つ「VR+対象」の意味構造       | 70  |
| 3.2.1.2 使役性を持たない「VR+対象」の意味構造     | 73  |
| 3.2.1.3 V と R が結びつく VR 構造の意味構造   | 75  |
| 3.2.2 使役を表す“得”構文の意味構造            | 75  |
| 3.2.2.1 使役意味を持つ VR 構造と「得」構文      | 76  |
| 3.2.2.2 使役を表す“得”構文の意味構造          | 77  |
| 3.2.3 使役を表す“把”構文                 | 79  |
| 3.2.3.1 「VR+対象」と“得”構文から“把”構文への変換 | 79  |
| 3.2.3.2 “把”構文の意味構造               | 79  |
| 3.2.3.3 「VR 構造」を含む“把”構文の意味構造     | 80  |
| 3.2.3.4 “得”を含む“把”構文の意味構造         | 80  |
| 3.2.4 まとめ                        | 81  |
| 3.3 本章の結び                        | 81  |
| 第 4 章 VR の項整合と意味構造               | 84  |
| 4.0 はじめに                         | 84  |
| 4.1 袁毓林 (2001) の分析               | 84  |
| 4.1.1 項整合                        | 85  |
| 4.1.2 項整合と VR の配価の不一致            | 86  |
| 4.2 VR の項整合と意味構造                 | 86  |
| 4.2.1 併価タイプ                      | 87  |
| 4.2.2 消価タイプ                      | 92  |
| 4.2.3 共価タイプ                      | 97  |
| 4.3 本章の結び                        | 106 |
| 第 5 章 VR の特徴と論理構造                | 108 |
| 5.0 はじめに                         | 108 |
| 5.1 VR の基本的特徴                    | 108 |
| 5.1.1 VR の結合レベル                  | 108 |
| 5.1.1.1 複合語的特徴                   | 108 |

|                                |     |
|--------------------------------|-----|
| 5.1.1.2 フレーズの特徴                | 109 |
| 5.1.2 VR の目的語                  | 109 |
| 5.1.3 V と R の動詞タイプ             | 110 |
| 5.1.4 VR の使役義―「目的語指向型」と「主語指向型」 | 111 |
| 5.2 VR の分類と論理構造                | 112 |
| 5.2.1 VR の分類                   | 113 |
| 5.2.2 使役義を持つ VR の論理構造          | 113 |
| 5.3 他動型 VR の論理構造               | 114 |
| 5.3.1 対格タイプ                    | 114 |
| 5.3.1.1 「2 項+1 項」対格タイプの論理構造    | 115 |
| 5.3.1.2 「1 項+1 項」対格タイプの論理構造    | 117 |
| 5.3.1.3 「1 項+2 項」対格タイプの論理構造    | 118 |
| 5.3.1.4 「2 項+2 項」対格タイプの論理構造    | 119 |
| 5.3.2 能格/非対格タイプ                | 120 |
| 5.4 自動型 VR の論理構造               | 123 |
| 5.4.1 自動詞の種類                   | 123 |
| 5.4.2 自動型 VR の三つのタイプ           | 124 |
| 5.4.2.1 非能格タイプの論理構造            | 124 |
| 5.4.2.2 1 項能格タイプの論理構造          | 125 |
| 5.4.2.3 V←R タイプの論理構造           | 127 |
| 5.5 動詞コピー形式の VR                | 128 |
| 5.6 受動者主語の VR                  | 130 |
| 5.7 本章の結び                      | 132 |
| 第 6 章 モンタギュー意味論による使役文の分析       | 134 |
| 6.0 はじめに                       | 134 |
| 6.1 モンタギュー意味論と PTQ             | 134 |
| 6.1.1 形式意味論における論理言語            | 134 |
| 6.1.2 PTQ の基本的枠組み              | 135 |
| 6.1.3 構成性の原理                   | 135 |
| 6.1.4 内包と外延                    | 136 |
| 6.1.5 意味公準                     | 137 |
| 6.2 統語規則と翻訳規則                  | 137 |
| 6.2.1 範疇と論理タイプ                 | 138 |
| 6.2.2 統語規則と意味規則                | 138 |
| 6.2.2.1 基本表現に関する規則             | 139 |
| 6.2.2.2 「主語 - 述部」に関する規則        | 140 |



|   |     |
|---|-----|
| 6.2.2.3 他動詞 (TV) に関する規則                             | 140 |
| 6.2.2.4 普通名詞の限定に関する規則                               | 140 |
| 6.2.2.5 等位接続に関する規則                                  | 141 |
| 6.2.2.6 その他の規則                                      | 142 |
| 6.2.3 内包演算子 <sup>^</sup> 、外延演算子 <sup>v</sup> と中括弧規約 | 142 |
| 6.3 “让 (叫)”、“使” 使役構文の意味分析                           | 143 |
| 6.3.1 “让” の範疇と翻訳                                    | 143 |
| 6.3.2 追加の規則   | 145 |
| 6.3.3 “让” 構文の分析                                     | 145 |
| 6.3.3 “使” 構文の分析                                     | 150 |
| 6.4 多義使役兼語文の意味分析                                    | 152 |
| 6.4.1 多義使役兼語文の分類                                    | 152 |
| 6.4.1.1 多義使役兼語文                                     | 152 |
| 6.4.1.2 非使役兼語文                                      | 154 |
| 6.4.2 多義使役動詞の統語構造                                   | 154 |
| 6.4.3 多義使役兼語文の論理分析                                  | 154 |
| 6.4.3.1 「命令」、「強制」を表す多義使役兼語文                         | 154 |
| 6.4.3.2 「請願」、「依頼」を表す多義使役兼語文                         | 166 |
| 6.4.3.3 「催促」、「提案」を表す多義使役兼語文                         | 167 |
| 6.4.3.4 「許可」、「許容」を表す多義使役兼語文                         | 169 |
| 6.4.3.5 「禁止」、「阻止」を表す多義使役兼語文                         | 171 |
| 6.4.3.6 $V_1$ が使役の意味を持たないもの                         | 176 |
| 6.5 本章の結び   | 178 |
| 結び  | 180 |
| 参考文献  | 185 |
| 用例の出典先  | 190 |

## 序論

### 1. 研究の目的

使役は、話者がある事態をどの視点から捉えたかによって言語上異なる形式が現れるヴォイス（相あるいは態）現象のひとつである。ヴォイスは、接辞を持つ日本語のような言語では形態的対立が文法に反映された文法的事象として捉えられるが、孤立語である中国語には受身や使役のヴォイス形態はない。そのため、中国語文法では、受身や使役は独立した文法事項としては取り扱われていない。しかし、ヴォイスを話者の視点が特定の形式に現れる現象として捉えるならば、ヴォイス現象はどの言語にも存在し、中国語にも受動や使役を表わす形式がある。中国語の文法研究において使役と形式を結び付けた最も早い指摘としては、王力（1985 [1943]）の研究がある。王力は“弄坏”（壊す）のような「動詞 - 結果補語構造」を“弄”が“原因”、“坏”がその結果を表すとしてこれを“使成式”と呼んだ。また、Chao（1968）は、「 $V_1+N_2+V_2$ 」の配列で  $N_2$  が  $V_1$  の目的語であると同時に  $V_2$  の主語の役割を持つ構造を「兼語構造」（pivotal construction）と呼び、文の一類として取り上げた。Chao はこの構造の第一動詞は「使役（cause to）」タイプであると述べている。また、近年の研究では、一部の“得”構文、“把”構文などが使役形式として取り上げられている。このように中国語の使役には統語的に異なる形式が用いられているが、これらが共に使役の概念を表しうるのは、共通の意味構造が存在するからであると推定される。そこで、本論では中国語の使役文を意味の角度から分析し、これらが共通の使役構造を持つことを論証する。

### 2. 考察の対象

現代中国語の使役文としてどのような形式を含めるか、またどのように分類するかは研究者によって意見が異なり共通の認識にはなっていない。范晓（2000）は、使役文として“使”構文、“V 使”構文、一部の“把”構文、使動文、指令文（兼語文）、使成文（動詞 - 結果語構造）、一部の“得”構文の7種類の形式を取り上げている。本論では、兼語構造を持つ文として“让”（“叫”）構文、“使”構文、兼語文を取り上げ、「動詞 - 結果補語（VR）」構造を含む文として VR 構文、“得”構文を取り上げる。本論では VR 構文は統語的構造ではなく複合語として扱う。また、“把”構文も考察の対象に含めるが、本論では“把”構文の文型意味は使役ではなく「モタラス」という広い意味での「授与」と捉え、“把”構文の使役義は、意味構造の内部に VR や“得”構文が構成する使役構造を含むために生じると考える。使役と関係する形式としては、この他に「動詞 - 方向補語」構造、「動詞 - 場所補語」構造、二重目的語文などが指摘されているが、それらについては本論の考察には含めない。

### 3. 研究方法

研究の方法としては、形式意味論の枠組みを用いる。形式意味論はモンタギューが数理論理学の技法を用いて体系化した意味論であり、「モンタギュー意味論」と呼ばれている。モンタギューは、言語の意味は統語的構造のように客観的に規定できないとする考えに対し、真理条件的意味規定、可能世界の概念の導入、モデル理論に基づく方法を用いた明示的な意味論の方法を示した。形式意味論では、一般に自然言語の表現を直接解釈するのではなく、一旦仲介の形式言語の表現に翻訳し、それを意味規則に従って解釈するという方法が採られる。3～5 章では、形式言語として命題論理 (propositional logic) と述語論理 (predicate logic) を用いた分析を行う。ここで用いる述語論理は一階述語論理で、高階言語に比べて簡易的であるが、自然言語の論理的表示として十分な説明能力を持っていると考える。6 章では、モンタギューが PTQ ('The Proper Treatment of Quantification in Ordinary English', 1974) で体系化した方法に基づき、タイプ理論と  $\lambda$  (ラムダ) 演算を含む高階言語 (内包論理=IL) を導入した分析を行う。

### 4. 使役文の意味構造

本論では、使役文の意味構造は 3 項関数であると考え、兼語構造を基盤とする使役文と、VR を基盤とする使役文の基本的な意味構造を次のように分析する。

#### <兼語構造>

(1) 我们派张三去。(我々は张三を派遣した)

差向 $\kappa$   $\sim$ ガ  $\sim$ ヲ 行 $\kappa$   $\sim$ ガ

(1') 派' [我们, 张三, 派' (我们, 张三) & 去' (张三)]

サ $\kappa$ ル  $\sim$ ガ  $\sim$ ニ  $\sim$ トヲ

#### <VR 複合語>

(2) a. 他踢破了门。(彼はドアを蹴って壊した。)

b. 她哭湿了手帕。(彼女は泣いてハンカチを濡らした。)

蹴 $\kappa$ リ  $\sim$ ガ  $\sim$ ヲ 壊 $\kappa$ ル  $\sim$ ガ スル  $\sim$ ガ  $\sim$  [完了]

(2a') 踢破' [他, 门, 踢' (他, 门) & 破' (门) & 有' {破' (门), 了}]

サ $\kappa$ ル  $\sim$ ガ  $\sim$ ヲ  $\sim$ トウ状態ニ

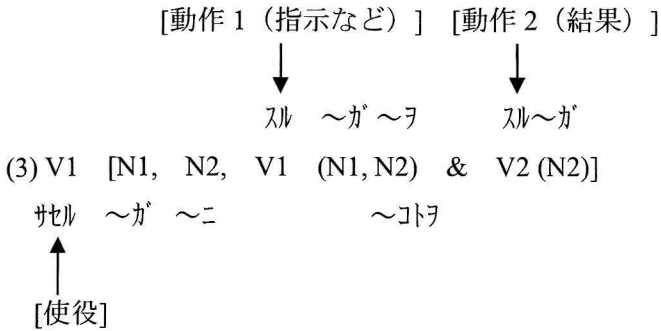
泣 $\kappa$ キ  $\sim$ ガ 至 $\kappa$ リ  $\sim$ ガ  $\sim$ ニ スル  $\sim$ ガ [完了]

(2b') 哭湿' [她, 手帕, 哭' (她) & 到' {哭' (她) & 湿' (手帕)} & 有' {湿' (手帕), 了}]

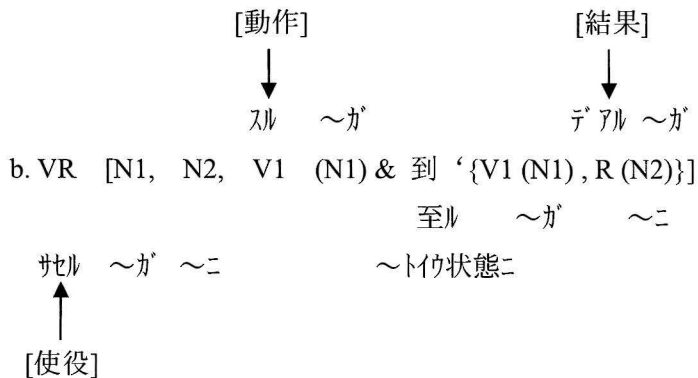
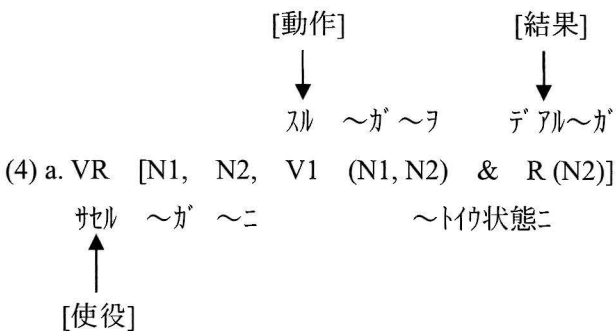
サ $\kappa$ ル  $\sim$ ガ  $\sim$ ヲ  $\sim$ トウ状態ニ

これらの論理式を一般化すると次のように表すことができる。

### <兼語構造の意味構造>



### <VR 複合語の意味構造>



## 5. 論文構成と各章の内容

本論文は序論と結びを除き、6 章で構成されている。

第 1 章 中国語の使役文の先行研究と本論の捉え方

第 2 章 分析理論－形式意味論の考え方と方法

第 3 章 兼語構造と VR 構造を基盤とした使役文

第 4 章 VR の項整合と意味構造

第 5 章 VR の特徴と論理構造

第 6 章 モンタギュー意味論による使役文の分析

第 1 章では、現代中国語の使役概念、使役形式について、本論が参考とした先行研究を取り上げる。中国語の使役概念を論述している研究としては、范晓 (2000) と熊仲儒 (2004)

を取り上げる。范晓は、使役構造は「ある実体に発生した状況（動作、行為、活動変化、状態など）が自発的なものでなく、使役主体の作用あるいは影響によって引き起こされたという事実を客観的に反映している」と述べ、使役構造を意味的な構造と捉えた。熊仲儒は使役を統語概念とし、統語構造上に機能範疇「Cause」が生起する文を使役構文と見なした。“使”構文、兼語文の先行研究としては、王力（1985 [1943], 2002 [1943, 1944]）、Chao（1968）、朱德熙（1982）の研究、及び述語論理を用いた温琳（2008）の分析を取り上げる。VRの研究としては、先駆的研究であるChao（1968）の研究、及び90年以降活発に行われてきた欧米の言語学理論を応用した分析の中から、生成文法理論に基づく何元建（2011）、Shibesma・沈阳（2006）の研究を取り上げる。使役を表す“得”構文の研究としては、李临定（2011）の研究及び松村（2011）の述語論理による分析を取り上げる。また、使役概念及びそれぞれの使役形式について本論の捉え方を提示する。

第2章では、形式意味論の考え方とその方法について述べる。形式意味論は、基本的に「構成性の原理」(the Principle of Compositionality)に基づいている。構成性原理は、「複合表現の意味は、その部分の表現の意味とそれらを複合する統語操作に基づき定められている。」(白井 1985: 37) とする原理である。1～3節では、形式意味論の基礎的な概念について説明し、中国語の例文を用いて、「統語分析 - 翻訳 - 意味解釈」のモデル意味論的な枠組みにおいて意味が規定される過程を示す。4節では、本論で用いる論理式について説明する。本論では、使役の論理構造の表記として一般的な「述語論理」に「談話概念」及び「意味役割」、「時相」の概念を導入した論理式を用いる。本章では、これらの理論的背景について述べ、中国語の使役構文の基本的な論理構造を示す。

第3章では、中国語の使役文を、兼語構造を基盤とする使役文と「動詞 - 結果補語 (VR)」構造を基盤とする使役文に大別し、それぞれの使役の意味構造を記述する。

第4章では、袁毓林（2001）が“述結式”（本論ではVR複合語）の項整合の分析において取り上げた例文について、これらを論理式で表記し、項整合と意味形成の関係を明確にする。

第5章では、VR複合語を他動型と自動型に分類し、それぞれについて論理式で表記し考察する。考察の結果として、「主語指向」の自動型VRは他動性を持たない使役構造（再帰的使役構造）を構成することを示す。また、「対格」、「能格」、「非対格」、「非能格」の動詞分類の概念を導入し、“哭醒”のような他動詞的にも自動詞的にも用いられるVRは能格的であるという主張を行う。このタイプのVRは、他動詞用法では使役交替が起き使役義を生起することを論理式で表記し論証する。

第6章では、モンタギュー意味論の枠組みに基づき、“让”構文、“使”構文及び兼語文の分析を行う。具体的な方法としては、モンタギューのPTQの内包論理(IL)による記述方法を用い、統語的生成と意味的形成が構成性の原理に基づき厳密に対応することを示す。

“让”構文と“使”構文の分析については、Mangione（1982）の“让”、“叫”構文の分析を参考とする。また、兼語文の分析については、Dowty（1979）が英語の作為動詞構文 (factitive

construction) の分析で用いた統語規則と翻訳規則を応用し、さまざまな兼語文の例文について論理構造を記述する。

## 6. 本研究の意義

中国語の使役は、統語的に異なる形式によって表現される。これらを統一的に捉えるためには、使役の構造を意味的に捉えることが有効である。本論では、それぞれの使役文を形式意味論の枠組みで分析し、異なる形式の使役文が使役関係を表す 3 項関数で構成されることを示した。分析の成果の一つとして、結合や統語的機能において多様性を持つ「動詞 - 結果補語 (VR) 複合語」の論理構造を明示し、R が「目的語指向」と「主語指向」の VR が共に使役構造を持つことを明らかにした。結果補語の運用は、非ネイティブ・スピーカーの中国語学習者にとって最も難しい文法形式の一つであり、VR の意味構造を論理的に理解することで学習の向上にも役立つと考える。また、モンタギューの PTQ の手法を用いた“让”、“使”構文及び兼語文の分析では、この方法により統語論と意味論を厳密に対応させることができることを示した。

## 第1章 中国語の使役文の先行研究と本論の捉え方

### 1.0 現代中国語の使役研究概観

中国語は、日本語の「セル・サセル」のような形態的な使役の接尾辞がなく、また“让”、“叫”、“使”、“令”などの使役動詞が用いられる構文も連動文あるいは兼語文の一類と捉えられたため、現代中国語文法では使役はまとまった文法範疇として扱われてこなかった。現代中国語の文法研究において、特定の形式が使役概念を表していることに言及した最も早い論述として、王力(1985 [1943])の“使成式”の指摘がある。王力は、因果関係を構成する述語 - 補語構造を“使成式”と呼んだ。中国語では使役は動詞が表す意味と捉えられてきた側面があり、使役義と文法形式の関係が論じられるようになったのは80年代以降のことである。彭利貞(1997)は、使役“cause”は意味範疇の一つであり言語の中で普遍的(universal)な特徴を持つと述べ、中国語の使役形式(causative form)として“使, 让, 叫, 令”を取り上げ、これらは英語の make や have と同様に「NP1 CAUSE NP2 V (p)」の CAUSE として機能すると分析している。范晓(2000)は、使役は「ある実体に発生する状況(動作、行為、活動変化、状態など)が自発的なものでなく、使役主体の作用あるいは影響が引き起こしたものである」という客観的事実を反映していると述べ、使役の本質を意味構造として捉えた。范晓は、使役の意味構造を持つ中国語の形式を顕在的使役文と潜在的使役文に分け、前者として“使”構文、“V 使”文、“使动”文、“把”構文、後者として“使令”文、“使成”文、“V 得”構文を取り上げている。“使成式”の早期の研究としては、Chao(1968)の詳細な論述があり、Chao はこれを統語的構造(フレーズ)ではなく動補式複合語(Verb-Complement (V-R) Compounds, 以下VR複合語という)と捉えている。以降の研究では「動詞(あるいは述語) - 結果補語」の結合体を統語的構造と捉えるか複合語と捉えるかで意見が分かれている。朱德熙(1982)は、これを述語 - 補語構造(“述补结构”)の一類に入れているが、“学会了开车”、“从来没有喝醉过”のように“了”や“过”を後ろに伴えることから文法機能上は一つの動詞と見なせると述べ、また一般の動詞と同様に自動詞/他動詞の区別があると指摘している。VRについての研究は、90年以降、欧米の言語学理論を応用した分析が盛んに行われるようになる。袁毓林(2001)は、VR(袁毓林では“述补式”)を動詞と補語の二つの項の整合と捉え、それぞれの項の配価タイプと整合タイプから分類し、項の整合過程の理論的分析を行った。また、VRの統語的研究としては、生成文法理論による研究を中心に議論が深まっているが、一致した見解は得られていない。本章では、現代中国語の使役について、使役概念の観点から論じた研究、及び使役を表わす個別の形式の研究の中から本論が参考とした研究を取り上げる。なお、例文に付した邦訳は、特に明記しない限り筆者訳である。

## 1.1 使役概念の観点からの研究

### 1.1.1 范晓 (2000)

范晓 (2000) は、使役義は言語において特定の統語構造として現れるが、本質的には意味レベルに生じる概念であると述べ、使役構造を意味構造と捉えている。范晓は、使役構造は二つの動詞中心構造 ( $S_1$ 、 $S_2$ ) からなり、現代中国語の最も典型的な使役構造の表現は“使”構文であると述べ、次のような例を挙げている。

(1) 寒风 (吹来) 使她的头脑清醒了。(冷たい風が、彼女の頭をはっきりさせた。)

(2) 老天 (下大雨) 使运动会延期了。(大雨で、運動会が延期になった。)

(1) の例文では“寒风吹”が  $S_1$ 、“她的头脑清醒”が  $S_2$  である。(2) の例文では“老天下大雨”が  $S_1$ 、“运动会延期”が  $S_2$  である。

范晓は、“使”は使役関係を表し、“使”の前の動詞中心構造は使役主体 ( $S_1$ ) を表し、“使”の後の動詞中心構造は使役主が作用した客体が形成する事態 ( $S_2$ ) を表すと述べ、使役の意味構造を次のように図示している。

(3)  $S_1 \xrightarrow{\text{使}} S_2$  (または、 $S_1 + \text{使} + S_2$ )

この使役構造は使役主体  $S_1$  が“使役”作用を発揮して、 $S_2$  という出来事を引き起こすことを表している。范晓は、 $S_1$  はある事態を表すので使役構造の基本は「主述構造+使+主述構造」であるが、文脈上の制約や簡潔化の必要から、 $S_1$  は省略や名詞化など様々な構造で現れると述べている<sup>1)</sup>。また、使役構造は具体的には、「使役主 (A)」、「使役 (sh)」、「被使役主 (B)」、「結果 (C)」の四つ部分から構成されるとして、次のように図示した。

(4)  $A \xrightarrow{\text{sh}} B \xrightarrow{\text{発生}} C$  (または、 $A + \text{使} + B + C$ )

范晓はこれらを総括して、使役構造は「A 致使 B 产生 C」のように表すことができると述べ、使役主 (A) を「新しい事件  $S_2$  を発生させる使役力」と捉えている。范晓はこれに基づき、使役主は一見「原因」のように見えるが、「動作主」と見なすことができ、統語上では「主語」に分析されると述べている。また、被使役主 (B) については、「使役対象」として同時に「結果が表す状態の主体」として、統語上は「目的語」に分析されるが、意味上は「対象」と「主体」の「兼格」<sup>2)</sup> であると述べている。結果 (C) については、「B が A の使役作用を受けた後の状況を表す」として、次のような例を挙げている。

(5) a. 我们使他放下包袱了。<B の動作行為を表す>

(われわれは彼に重荷を下ろさせた。)

b. 我们使他成了有用的人。<B の変化を表す>

(われわれは彼を有用な人物にした。)

c. 孤独使他很痛苦。<B の性質状態を表す>

(孤独が彼をひどく苦しめた。)

d. 为官清廉使他名声大振。<B の性質状態を表す>

(役人として清廉であることが彼の名声を大いに高めた。)

使役 (sh) については、「A と B の間の使役関係を表す」とし、“使”は現代中国語の典



型的な使役形式であり、「使役義」のマーカールと見なすことができると述べている。また、“使”と同じ機能を持つものとして“叫、让、令、使得、致使”を挙げている。范晓は使役義を表す文を使役文と呼び、現代中国語の使役文を二つの類に大別している。第一の類は、「明示的使役文」(または、有標使役文)で、明確な使役義を表わす。この類として、“使”構文、“V 使”構文、使役を表わす“把”構文、使動文<sup>3)</sup>を挙げ、これらは“使”に入れ替えられるか、“使”構文に変換できると述べている。第二の類は、「潜在的使役文」(または、無標使役文)で、使役義がやや不明瞭なものである。この類としては、“使令”構文、兼語文<sup>4)</sup>、VR 複合語、“V 得”構文を挙げ、これらの文は“使”構文に変換できないが、文の内部に使役関係が内在していると述べている。

### 1.1.2 熊仲儒 (2004)

熊仲儒 (2004) は、使役を統語上の概念と捉え、使役は統語構造上で機能範疇 Caus の位置に生起し、使役主の意味役割を指定部 (Spec) に生じる成分に付与すると述べた。熊仲儒は生成文法理論を応用し、使役の構造を次のように示し、このような構造を持つ文を使役文と定義している。

(6) [<sub>caus</sub>P Spec [<sub>caus</sub> [<sub>Caus</sub>][<sub>Bec</sub>P Spec [<sub>Bec</sub> [<sub>Bec</sub> [<sub>VP</sub> [Spec] [V]]]]]] (熊仲儒 2004: 20)

熊仲儒は、Goldberg(1995)が提示した①使役移動構文②転移使役移動構文③二重目的語構文④結果構文の四つの構文を総括して使役構文 (Causative Constructions) と位置付け、これらに対応する中国語の文型には次のような文があると述べた。

- (7) a. 他放了一本书在桌子上。(彼は一冊の本を机の上に置いた。) [使役移動構文]  
 b. 他送了一本书给张三。(彼は一冊の本を张三にあげた。) [転移使役移動構文]  
 c. 他送了张三一本书。(彼は张三に一冊の本をあげた。) [二重目的語構文]  
 d. 他吃完了饭。(彼はご飯を食べ終わった。) [結果構文] (熊仲儒 2004: 31)

また、これらの文はそれぞれ次のように“把”構文にすることができ、さらに基本的に(9)のような動詞コピー文にも対応すると述べている。

- (8) a. 他把书放在桌子上。[使役移動構文]  
 b. 他把书送给张三。[転移使役移動構文]  
 c. 他把书送了张三。[二重目的語構文]  
 d. 他把饭吃完了。[結果構文] (熊仲儒 2004: 31)

- (9) a. 他放书放在桌子上。[使役移動構文]  
 b. 他送书送给张三。[転移使役移動構文]  
 c. 他送书送给了张三。[二重目的語構文]  
 d. 他吃饭吃完了。[結果構文] (熊仲儒 2004: 32)

これらのことから、熊仲儒は中国語の使役文として、“得”構文、“把”構文、動詞コピー文、動補構造、二重目的語文、与格文を使役構文に含めた。熊仲儒は、これらの構文はすべて「動作主、被動作主、結果 (顕在的、潜在的な結果を含む)」を含み、統一的に(6)

の使役構造で表すことができると述べ、それぞれをについて次のように表記した。

- (10) “把” 構文 :  $[_{causP} Spec [_{caus'} [_{Caus} 把] [_{BecP} Spec [_{Bec'} [Bec] [_{VP} [Spec] [V]]]]]]]$   
 (11) “得” 構文 :  $[_{causP} Spec [_{caus'} [_{Caus}] [_{BecP} Spec [_{Bec'} [Bec 得] [_{VP} [Spec] [V]]]]]]]$   
 (12) 動詞コピー文 :  $[_{causP} Spec [_{caus'} [_{Caus(S)VO}] [_{BecP} Spec [_{Bec'} [Bec] [_{VP} [Spec] [V]]]]]]]$   
 (13) 動補構造 :  $[_{causP} Spec [_{caus'} [_{Caus}] [_{BecP} Spec [_{Bec'} [Bec] [_{VP} [SpecR] [V]]]]]]]$   
 (14) 与格文 :  $[_{causP} Spec [_{caus'} [_{Caus}] [_{BecP} Spec [_{Bec'} [Bec] [_{VP} [Spec 给...] [V]]]]]]]$   
 (15) 二重目的語文 :  $[_{causP} Spec [_{caus'} [_{Caus}] [_{PossP} Spec [Poss] [_{Bec'} [Bec] [_{VP} [Spec(给)...] [V]]]]]]]$   
 (熊仲儒 2004:32)

### 1.1.3 本論の捉え方

本論では、使役は概念的には、(x) によって、(y) が変化し、ある状態になる事態を捉えたものであり、使役文は以下のような事態の連鎖全体を一つの文で表すと考える。

- (16)  $\langle x \rangle \longrightarrow [\langle y \text{ の変化} \rangle \rightarrow \langle y \text{ の状態} \rangle]$   
 $\left\{ \begin{array}{l} \cdot x \text{ の行為} \\ \cdot \text{ 個体 (の力)} \\ \cdot \text{ 命題 (の原因力)} \end{array} \right.$

使役文において、x は「動作主あるいは力の持ち主 (使役者)」であり y は「対象 (被使役者)」である。y は x の働きを受け「動作主」あるいは「経験者」として変化し、ある状態になる。 $\langle x \rangle$  には「x の行為」「個体 (の力)」「命題 (の原因力)」がある。また、 $\langle x \rangle$  は先行事象 (原因事象)、 $[\langle y \text{ の変化} \rangle \rightarrow \langle y \text{ の状態} \rangle]$  は結果事象であり、使役文はこの二つの事象を含む。使役は概念上、先行事象が起こらなければ結果事象が起こらないことから、二つの事象は「因果関係」として捉えられる。

本論では、形式意味論の立場から、使役を「(x) ガ、(y) ニ、～コトヲサセル」という論理関係を構成する 3 項関数と捉え、次のように規定する。

- (17) CAUSE ( $\alpha, \beta, \gamma$ )

サセル ～ガ ～ニ～コトヲ

前述の概念構造の x、y は、論理構造中の  $\alpha$ 、 $\beta$  に対応する。 $\gamma$  は複合命題であり、基本的には「 $\gamma 1 \& \gamma 2 \& \gamma 3$ 」のように部分命題の連鎖として生起する。使役概念の「x の行為」は  $\gamma 1$  に、「x から y への働きかけ→」は  $\gamma 2$  に、「y の変化 (或いは変化状態)」は  $\gamma 3$  に現れる。すなわち、論理構造中の  $\gamma 1$  は「意味役割」、 $\gamma 2$  は「量化」、 $\gamma 3$  は「着点」を表す。中国語の“让”、“使”、使役義を持つ“得”、動詞 - 結果補語 (VR) 複合語は、それぞれ使役関数として CAUSE の位置に生起する。

## 1.2 “让”、“叫”、“使” 構文、兼語文の先行研究

“让”、“叫”、“使”などの使役動詞を用いた使役構文や兼語構造 (pivotal constructions) を持つ構文の研究におけるこれまでの議論の中心は、これらの統語構造をどのように捉える

かという統語論的な問題であった。これらの構文の構造については、さまざまな提案が出されているが、定説には至っていない。使役構文の構造分析の難しさは、一つには使役概念を表す文は直観的には3項構造であり、2項を基準とする構成素分析にはなじまないということがある。第二に、中国語に特有の使役構文として認知されている兼語構造の文法内の位置づけの問題がある。兼語構造は、「 $V_1+N+V_2$ 」のNが $V_1$ の目的語かつ $V_2$ の主語という二つの役割を果たす構造である。Chao (1968) がこのような構造を持つ文 (pivotal sentences) を文の一形式として取り上げて以降、兼語文は独立した構文形式と見なされるようになった。しかし、朱德熙 (1982)、范晓 (2000) などはこの考えに異を唱えている。朱德熙 (1982) は、兼語構造は述連構造 (連動文) の一形式であり、Nの役割の二面性は意味関係的なもので統語上Nは目的語以外ではありえないと指摘している。また、范晓 (2000) は、Nは統語上「主語／目的語」を兼ねているのではなく、意味上「動作主／対象」を兼ねた「兼格」であると述べている。このように、この問題は、Nと前後の動詞との関係を統語的なもの捉えるか、意味的なものと捉えるかに関係している。さらに、意味的な関係だとしてもそれがどのように統語上に反映されているのかということが問題となる。以下では、この二つの問題に関する議論に的を絞り、主要な研究を取り上げる。

### 1.2.1 王力 (1985 [1943], 2002 [1943, 1944])

王力は、《中国現代語法》(1985 [1943]) において、二つの小節を含み、前節の述語の一部または全部が後節の主語になっている連結構造を“递系式”と呼んだ。王力は“递系式”のうち、“你叫他来”(あなたは彼に来るように言いなさい)のような第一節の目的語が同時に第二節の主語である構造を、“要求”を叙述する類として分類している。このような構造は、現在では兼語文と呼ばれている。王力は、“你叫他来”の“你”は第一節の主語であり、“他”は第一節の目的語あると同時に第二節の主語であると述べ、次のような図で示した。

(18) 你 叫 | 他 …… 来 或 你 叫 | …………… 他 来。(王力 1985 [1943]: 138)

王力は、“递系式”について「一つの文(節)で意味が十分伝えられないときに、もう一つの文(節)を加えることができる」(王力(2002 [1943]: 69)と述べているように、この構造を述語の連続ではなく、文の連続構造と捉えている。また、要求を直接的に伝える“来”(来い)などの表現と異なり、間接的に要求を表現する形式では必ず要求される人(被要求者)を明示する必要があると述べている。王力は“要求”を表す類として、第一節の述語に“叫”、“请”、“劝”などの要求を意味する動詞を用いる文の他に、第二節の述語が“命令、請求”を表す次のような文も含めている。

(19) 而且老太太又打发了人来安慰你。(その上老夫人はあなたを慰めるよう人を遣わした。)  
(王力 1985 [1943]: 139)

また、第一動詞が“帮助、许可”を表す文や、“人にある心理状況を発生させる”文も同じ構造を持つと述べている。

### 1.2.2 Chao (1968)

Chao (1968) は、兼語構造は動詞表現  $V_1$ 、名詞表現  $N$ 、動詞表現  $V_2$  の連続からなり、 $N$  が  $V_1$  の目的語としても  $V_2$  の主語としても機能している構造であると述べ、次のような例を挙げている。

(20) 我们派他做代表。(私たちは彼を派遣して代表にする。) (Chao1968: 125)

(21) 他请你帮忙。(彼はあなたに手伝ってくれるよう頼む。) (Chao1968: 125)

Chao は、兼語構造は音声上兼語の地位が定まっていないと指摘している。Chao によれば、兼語が代名詞の場合は軽声でも軽声でなくてもよく、事物の場合は軽声になり、固有名詞の場合は軽声にはならない。また、兼語構造は節目的語をとる構造とは異なると述べ、次のような例を挙げている。

(22) 我请你就走。I ask you to go right way. (兼語文)

(私はあなたにすぐに行くように頼む。) (Chao1968: 125)

(23) 我说你就走。I say that you go right away. (節目的語文)

(私は、あなたはすぐに行きなさいと言う。) (Chao1968: 125)

Chao によれば、(23) のような「言う、思う」タイプの動詞は次のように後方に付加する形式にすることが可能であるが、兼語構造はそれができない。

(24) 你就走，我说。You must go right away, I say.

(あなたはすぐに行きなさい、と私は言う。) (Chao1968: 125)

(25) \*你就走，我请。(Chao1968: 125)

これは兼語が第一動詞の目的語でもあるからであり、次のように兼語を繰り返せば適正な表現になるという。

(26) 你就走，我请你。You must go, I ask you.

(あなたはすぐに行きなさい、と私はあなたに頼む。) (Chao1968: 125)

また、兼語文は緊縮文 (compressed sentences) と異なると述べ、次のような例を挙げている。

(27) 我请他 (，他) 也不来。I asked him (and he) wouldn't come, either. (圧縮文)

(私が彼に頼んでも、彼は来ない。) (Chao1968: 125)

(28) 我请他不来。I asked him not to com. (兼語文)

(私は彼に来ないように頼む。) (Chao1968: 125)

(28) の兼語文は (27) の文のように、(，他) を挿入して “\*我请他，他不来” のように拡張することができない。Chao は、一般に兼語前置動詞 (pre-pivotal verbs) は、「使役」タイプで、それに対し節目的語を伴う思考動詞 (think verbs) は「思う、言う」タイプであると述べている。兼語前置動詞としては、以下のような動詞を挙げている。

(29) 叫 (教)、使、让、准/许/准许、要、请、劝、催、逼、引、鼓动、怂恿、认、选/举/选举、派、帮 (着)、陪 (着)、带 (着)、领 (着)、扶 (着)、送、怪、怕、喜欢、埋怨、禁止など。(Chao1968: 126)

### 1.2.3 朱德熙 (1982)

朱德熙 (1982) は、兼語構造を述連構造<sup>5)</sup> (“连谓结构”、連動文とも呼ばれる) であると述べ、兼語構造を述連構造と異なる構造だとする見方に異を唱えている。朱德熙は、述連構造の典型的な構造は「 $V_1+N+V_2$ 」であり、この構造の  $V_1$  は動詞、 $N$  は  $V_1$  の目的語、 $V_2$  は後置される直接成分中の動詞であると述べている。朱德熙によれば、 $N$  と  $V_2$  は“开着窗户睡觉”(窓を開けたまま寝る) のように意味的に無関係なものもあれば、緊密に結びついているものもあり、その意味関係は次のように多様である。

- (30) a. 请客人吃饭 (客を招いて食事をしてもらう) < $N$  が  $V_2$  の動作主>  
b. 买一份报看 (新聞を一部買って読む) < $N$  が  $V_2$  の対象>  
c. 帮他洗碗 (彼に代わって茶碗を洗ってあげる) < $N$  が  $V_2$  の与事>  
d. 买把刀切菜 (包丁を一丁買って野菜を切る) < $N$  が  $V_2$  の道具>  
e. 躺·de 床上看书 (ベッドに寝転がって本を読む) < $N$  が  $V_2$  の場所> (朱德熙 1982: 162)

朱德熙は、このうち  $N$  が  $V_2$  の「動作主」である (30-a) のような類がいわゆる兼語式と呼ばれているものであり、この類の  $N$  も他と同様に構造上は  $V_1$  の目的語であり、 $V_2$  の主語ではありえないと述べている。このように、朱德熙は“请客人吃饭”のような文が構造上「 $V_1+N+V_2$ 」の  $N$  が  $V_1$  の目的語と  $V_2$  の主語を兼ねるという見方を否定し、この関係を意味上の関係であると主張した。また、 $N$  と  $V_2$  がどのような関係をとるかは  $V_1$  の種類により、 $V_1$  が「使役」の意味を含む動詞であるときは、主語は  $V_1$  の動作主で  $N$  は  $V_2$  の動作主であると述べ、次のような例を挙げている。

- (31) a. 很多人求他帮忙 (多くの人が彼に助けてくれるよう求めている)  
b. 你叫食堂多做点饭 (あなたは食堂にもっとたくさんご飯を作るように言いなさい)  
c. 上级命令部队立刻出发 (上層部は部隊にすぐ出発するよう命令した)

(朱德熙 1982: 163)

また、 $V_1$  が「随伴」や「協力」の意味を含む動詞であるときは、「使役」の類と同様に主語は  $V_1$  の動作主、 $N$  は  $V_2$  の動作主であるが、主語は  $V_2$  の動作に参与するため  $V_2$  の動作主でもあると述べている。

- (32) a. 爷爷领着孙子上动物园 (お祖父さんは孫を連れて動物園に行った)  
b. 你陪着客人喝酒 (あなたは客の相手をして酒を飲みなさい)  
c. 你扶着老太太上车 (あなたはお祖母さんを支えながらバスに乗りなさい)

(朱德熙 1982: 163)

「使役」の類と「随伴」、「協力」の類は  $N$  が意味上  $V_2$  の動作主の役割を果たす点で似ているが、朱德熙は両者の区別として、前者は“着”、“了”を伴えないが、後者は“着”、“了”を伴うことができると指摘している。また、朱德熙は  $V_1$  が“着”を伴うときは  $V_2$  の表す動作の方法を表し、“爷爷领着孙子上动物园”の“领着孙子”は“爷爷上动物园”の方法を表す修飾と捉えられると述べている。

#### 1.2.4 温琳 (2008)

温琳 (2008) は、形式意味論の立場から「使構文」を取り上げ、論理式で記述した。使構文としては、“使” 構文、“使得” 構文、“致使” 構文、“令” 構文、“叫” 構文、“让” 構文を含めている。温琳は、使役を「誰かが誰かに (指示して) 或る行為をするようにしむける」という文における「使役者」、「遂行者」、「行為」の間の 3 項関係であると捉え、論理式を用いて論理構造を記述した。“使” 構文としては、次のような例文を取り上げている。

(33) 后悔使他对一切都冷淡了些, 干吗故意找不自在呢?

(後悔が彼を何事につけても冷淡にさせた。なんでこんなバカなまねをしたんだ。) <sup>6)</sup>

(温琳 2008: 98, 老舍《骆驼祥子》)

温琳は、この文の使役に関する部分“后悔使他对一切都冷淡”を次のような論理式で表記している。

(34) 使’{后悔, 他, 冷淡’(他, 一切)}

サル ～が ～ニ ～コヲ

温琳は、「冷淡’(他, 一切)」が「彼は何事につけても冷淡だ」の意を、「使’{后悔, 他, }」が「後悔が彼にさせた」という意味を表し、論理式全体が「後悔が、彼に、彼が何事につけても冷淡であることを、させた」という意味を表すとしている。また、“让” 構文の分析では、次のような例文を取り上げている。

(35) 夏太太倒常出去, 可是总是在四点左右就回来, 好让祥子去接夏先生。

(夏奥さんは逆によく出かけるが、いつも四時頃には帰り、祥子を夏旦那さんの迎えに行かせる。) <sup>7)</sup>

(温琳 2008: 112, 老舍《骆驼祥子》)

温琳は、この文の使役を表わす部分を“夏太太让祥子去接夏先生”として取り出し、その論理構造を以下のような論理式で表記している。

(36) 让’{夏太太, 祥子, 去’(祥子)& 接’(祥子, 夏先生)}

サル ～が ～ニ ～コヲ

#### 1.2.5 本論の捉え方

本論では、温琳 (2008) と同様に、“让”、“使” 構文の論理構造は基本的に 3 項関数であると考え。たとえば、“使” 構文では、“使” は使役の 3 項関数「使’( $\alpha$ ,  $\beta$ ,  $\gamma$ )」として機能すると捉える。“让”、“使” 構文の論理構造については、本論では「談話概念」を導入した新たな論理式を提示する。本論で提示する論理式では、使役の 3 項関数の  $\alpha$  項と  $\beta$  項には談話情報が生起し、 $\gamma$  項には命題的意味を表す複合命題が生起すると想定する。たとえば、温琳が用いた例文 (35) の“夏太太让祥子去接夏先生”の論理構造は、本論の分析では次のように記述する。

(37) 让’[夏太太, 祥子, 有’(夏太太, [使令力])& 到’([使令力], 祥子)& 去’(祥子)& 接’(祥子, 夏先生)]

サル ～が ～ニ ～コヲ

$\alpha$   $\beta$   $\gamma 1$   $\gamma 2$   $\gamma 3$



この論理式では、“让”は文全体の使役を表わす3項関数「让’( $\alpha, \beta, \gamma$ )」として機能している。 $\alpha$ 項と $\beta$ 項は談話情報で、 $\alpha$ 項が「話題」、 $\beta$ 項が「副話題」である。 $\gamma$ 項には、この文に含まれる命題意味がすべて現れる。 $\gamma 1$ には $\alpha$ 項の「意味役割」が生起する。この文の“让”は、具体的動作を表わさない単純使役義の使役動詞ある。そこで、ここでは「～が～に指示する」という動作関係ではなく、「夏奥さんが指令力を持つ」という属性だけが存在すると捉え、これを[使令力]と表記する。[ ]は論理形式を表す。本論では[使令力]には「対象」の意味役割を規定している。 $\gamma 2$ には「[使令力]が祥子に到る」という「量化」が現れる。 $\gamma 3$ にはその結果生じる「祥子が行く」と「祥子が夏先生を迎える」という命題が生起する。これが複合命題の「着点」として機能する。本論の分析の枠組みでは、「使役主」と「被使役主」の意味役割は、 $\alpha$ 項の「話題」と $\beta$ 項の「副話題」に対応するが、これらは談話的意味を表す階層に生じ、命題的意味を持つ意味役割とは異なるものと捉える。

### 1.3 VR についての先行研究

#### 1.3.1 先駆的研究

VR についての先駆的研究として、王力(1985 [1943], 2002 [1944])と、Chao (1968)を取り上げる。王力は、動詞 - 結果補語の結合を統語的結合と捉え動詞句(連語)とし、Chao はこれを語の内部の結合と捉え複合語としている。中国語の言語事実を踏まえた両者の研究は本質的な指摘を多く含んでいる。

##### 1.3.1.1 王力(1985[1943], 2002[1944])

王力は、《中国現代語法》(1985 [1943])の中で、「述語と補語が因果関係にあるもの」を“使成式”と呼んだ。たとえば、“弄坏”(壊す)は、“弄”(いじる)が原因、“坏”(壊れる)が結果であり、“坏”は“弄”が「～になるようにさせた」(“使成”)ことを表す。注目すべきは、王力は“弄坏”を“因为不弄就不会坏”(いじらなければ壊れなかった)を表すと述べ、原因と結果の間には「反事実的推論」が成り立つと捉えていることである。これは、使役の定義としてしばしば引用される Shibatani (1976)<sup>8)</sup>が提示した考え方と基本的に一致する。王力は、“使成式”を句(“伪語”)とし、“弄坏”の“弄”は行為を表すので中心語(“中心”)で、“坏”は“弄”を制限しているので補語(“末品補語”)であると述べている。

王力は“使成式”を二種類に分けている。第一類は補語が形容詞で、ある行為が引き起こした状態を表すもので、次のような例を挙げている。

(38) 是我弄坏了他了。(私がそれを壊したのだ。) (王力 1985 [1943]: 117)

(39) 你们把极小的事倒说大了。(あなたたちは些細のことを大げさに言った。)

(王力 1985 [1943]: 117)

第二類は、補語が自動詞のもので、これをさらに主要動詞が自動詞か他動詞かで二つの小類に分けている。主要動詞が他動詞の類は、補語(自動詞)と結合しての他動詞句を構

成し、その行為が引き起こした状態が受動者に起きたことを表す。

(40) 黛玉用手轻轻笼住了束发冠儿。(王力 1985 [1943]: 118)

(黛玉はそっと髪飾りを抑えた。)

一方、主要動詞が自動詞の類は自動詞句を構成し、その行為が引き起こした状態は動作主に起きたことを表すと述べている。

(41) 因为睡迷了，来迟了一步。(王力 1985 [1943]: 118)

(ぐっすりと寝てしまい、ちょっと遅くなった。)

また、王力は、“使成式”の補語として“进”“出”“上”“下”“来”“去”などの単純方向補語や、“进来”“起来”などの複合方向補語も含めている。

王力は、《中国语法理论》(2002 [1944])の中で、VRの研究において現在も議論され続けているいくつかの問題についてすでに重要な主張を展開している。第一に、VRの結合については、独立した述語と補語の統語的な結合と捉えている。VRを単語と見なさない根拠として、たとえば“弄坏”(いじって壊す)は“弄得坏”(いじって壊せる)や“弄不坏”(いじって壊せない)のように分離することができ、“弄”(いじる)と“坏”(壊れる)は明らかに語であるからであると述べている。第二に、VRの機能としては、欧米語が屈折や接辞によって“causative”を表現する形式を持つと同じように、中国語ではVRの結合形式によって“causative form”を形成していると述べている。ただし、“使成式”は欧米の“causative”と異なり、使役の方法に重点が置かれ、それを述語が叙述していると指摘している。たとえば、“缩短”(縮める=縮めて短くする)は、“删短”(削って短くする)、“割短”(切り落として短くする)“削短”(削って短くする)のように使役の方法部分を変えて表現することができる。このことから、王力は“使成式”は二つの概念の結合から成り、欧米の“causative”より複雑であると述べている。第三に、欧米語の“causative”にはない“使成式”の特徴として、“饿死”(餓死する)、“睡着”(寝つく)、“飞掉”(飛び落ちる)などのように自動詞的に用いられるものがあることに言及している。王力は自動詞的な行為にも結果はあり、「cause-effect」(原因-結果)の関係を表すことができると述べ、“饿死”などの自動詞的なものも“使成式”、すなわち“causative”といえるとしている。このことは、自動詞的VRが他動詞的VRと「cause-effect」という共通の意味構造を持っていることを示唆しており、本論ではこのようなVRを「再帰的使役」と捉える(本論第5章参照)。

### 1.3.1.2 Chao (1968)

Chao (1968)は、“吃饱”(食べて腹いっぱいになる)のような動詞-結果補語の結合を語彙的な複合語<sup>9)</sup>と捉え、「動詞-補語複合語」(Verb-complement (V-R) Compounds, 以下VR複合語という)と呼んだ(Chao 1968: 435-480)。一方、同じように動詞-補語の結合であっても場所目的語をとる“坐在地下”(床に座る)、“走到张家”(張家まで歩く)のような動補式や、“他唱的好听”(彼は歌うのがうまい)のような文については統語的な動補構造(Verb-Complement Constructions, 以下VR構造という)と捉えている。



Chao によれば、VR 複合語の補語は拘束的に動詞の後に続き、場所や程度を表す統語的 VR 構造よりももっと密接な方法で動作の結果を表わす。Chao は、VR 複合語は VR の二つの成分が自由 (Free=F) か拘束的 (Bound=B) か、生産的か制限的か、複合語として合成的か語彙的か、拡張できるかできないかのどちらの場合もありえると述べている。たとえば、“弄好” (うまくやる) は、二つの成分が共に F でかつ生産的であり、意味上合成的で、“弄不好” (うまくやれない)、“弄的很好” (とてもうまくできた) のように拡張できる。Chao は、このような複合語は、「臨時的」に語を形成していると述べている。一方、“克服” (克服する) は二つの成分が共に B で結合が制限的、固定的で、“\*克得很服” のように言うことができない。

Chao は VR 複合語を音韻的特徴 (Phonological Features)、拡張性 (Expandability)、接尾辞“了”の生起<sup>10)</sup> (Occurrence of Suffix -le) の三つの観点から詳細に考察し、拡張性に基づき以下のように分類している。

①緊密的 VR 複合語 (Solid V-R Compounds) は、挿入辞 (infix) や挿入成分をとれない。たとえば、“革新”、“改良”、“规定”、“说破” (すっぱ抜く) は“说得 (不) 破”のように言えない。また、“养活 yeang.huo” ((家族を) 養う) と“养活 yeang-‘hwo” 「(ペットを) 飼う」は異なる。Chao によれば、前者は緊密的 VR だが、後者は拡張可能な VR で、また前者は“了”、“着”を伴えるが、後者は“了”しか伴えない。

②挿入辞がとれる VR 複合語 (Infixable V-R Compounds) は中間的なタイプで、“得”“不”を挿入して可能補語を作れるが、他の成分は挿入できない。たとえば、“看破” (見抜く) は、“看得破” (見抜ける)、“看不破” (見抜けない) ということができる。

③拡張可能な VR 複合語 (Expandable V-R Compounds) は、動詞と補語が共に自由 (free) であれば一般に句を構成する挿入語をとれる。たとえば、“吃饱” (腹いっぱい食べる) は、“吃的太饱” (腹いっぱいになりすぎた)、“吃的不很饱” (それほど腹いっぱいにならなかった) と言える。ただし、Chao によれば、VR 複合語が拡張可能なことは、実際に拡張された後も複合語であるということを意味しない。たとえば、“吃的太饱”は、述語性補語構造 (a predicate-complement construction)<sup>11)</sup> で、“吃的”は主語で“太饱”は述語であるとしている。

Chao は、VR 複合語の第一動詞には、形容詞も含めほとんどの動詞を用いることができると述べている。また、補語としては以下のようなリストを挙げている。

(42) 好、坏、对、错、早、迟、晚、快、慢、久、远、长、短、高、矮、大、小、宽、窄、深、弯、直、平、匀、正、反; 翻、拧、倒、斜、歪、圆、扁、钝、空、满、粗、细、厚、薄、光、毛、透、穿、通、塞、散、松、轻、脆、僵、硬、软、结实、强、弱、破、断、碎、烂、干、湿、潮、湿、热、冷、凉(快)、暖和、冻、干净、脏、清楚、明白、腻、恶心、病、死、活など。(Chao1968: 444-446 一部抜粋)

Chao は VR 複合語が目的語を伴う構造について、主語と目的語のどちらが補語の動作主になるのかによって異なる特徴を持つと述べ、次のような例を挙げている。

(43) a. 我骂哭了他了。(私が怒って泣かした。)

b. 你做累了事可以歇歇。

(あなたが仕事して疲れたならちょっと休んでいいですよ。)(Chao1968: 472-473)

(43- a)では、「泣いた」のは目的語の「彼」であり、(43- b)では、「疲れた」のは主語の「あなた」である。Chao によれば、この違いは、“把”によって言い換えられるかどうかに反映される。前者のように補語が目的語に属している場合は“把”によって言い換えることができるが、後者のように補語が主語に属している場合は言い換えられないとしている。

(44) a. 我把他骂哭了。(私は彼を怒って泣かした。)

b. \*我把事做累了。

(Chao1968: 473)

### 1.3.2 VR についての生成文法による研究

VR の統語的な研究については、欧米の研究者を中心に生成文法理論を応用した研究が多くなされている。生成文法による分析のこれまでの議論及び対立している問題については、何元建 (2011) が詳しく述べている (何元建 2011: 263 参照)。本論は意味論を中心としているが、統語論の議論の中には意味構造を考える上で重要な分析が含まれている。そこでここでは、比較的新しい研究から何元建 (2011) と Sybesma・沈阳 (2006) を取り上げる。

#### 1.3.2.1 何元建 (2011) の分析

何元建 (2011) は、生成文法の枠組みで現代中国語文法の全面的な記述を行なった。何元建は、VR 構造のこれまでの研究において議論となっている問題として、次の二点を挙げている。第一は、V1-V2 形式はすべて VR 構造なのかという問題である。これまでの研究では、主語指向の“他吃饱了饭”も、目的語指向の“他吃完了饭”も共に VR 構造と見なされてきた。しかし、最近の研究では他言語において結果補語がすべて目的語指向であることから、目的語指向の V1-V2 のみを VR 構造とするべきだという見方が提出されている<sup>12)</sup>。第二は、VR 構造は複合語なのか、あるいは統語上合成された形式なのかという問題である。

第一の問題について、何元建は、VR 構造には「動補タイプ」と「非動補タイプ」があり、動補タイプだけが目的語指向であると述べ、以下のような例を挙げている。

(45) a. 张三吃饱了饭。(張三のご飯を食べてお腹いっぱいになった。)

b. 张三吃完了饭。(張三のご飯を食べ終わった。)

(何元建 2011: 264)

何元建は、(45-a)は“张三吃饭，张三饱了”という内容を表し、V1 と V2 は共に主語を指向するので「並列構造」の「非動補タイプ」で、一方(45-b)は“张三吃饭，饭完了”という内容を表し、V1 は主語を指向し V2 が目的語を指向しているので「従属構造」の「動補タイプ」であるとした。そして、このように捉えることで、VR 構造が「補語は必ず目的語を指向する」という「直接目的語制限条件」(Direct Object Restriction=DOR)<sup>13)</sup> に適合することを説明できると主張した。つまり、「非動補タイプ」は補語を含まないので DOR 適合の問題は起きず、「動補タイプ」は目的語指向なので DOR に適合する。

第二の問題については、V1-V2 構造を複合語と考えた方が中国語の言語事実に近く、また統語理論的に見ても経済的であると述べている。何元建は、「目的語指向」の V1-V2 構造はすべて二項動詞であるとし、「対格タイプ」(accusative)と「二項能格タイプ」(two-place ergative)に分類した。「二項能格」とは、たとえば次のような動詞である。

- (46) a. 张三感动了李四。(張三は李四を感動させた。) <二項能格>  
 b. 张三感动了。(張三は感動した。) <一項能格> (何元建 2011: 268)

一方、対格動詞には一項対格動詞は存在しない。

- (47) a. 张三批评了李四。(張三は李四を批判した。) <対格>  
 b. \*张三批评了。(何元建 2011: 269)

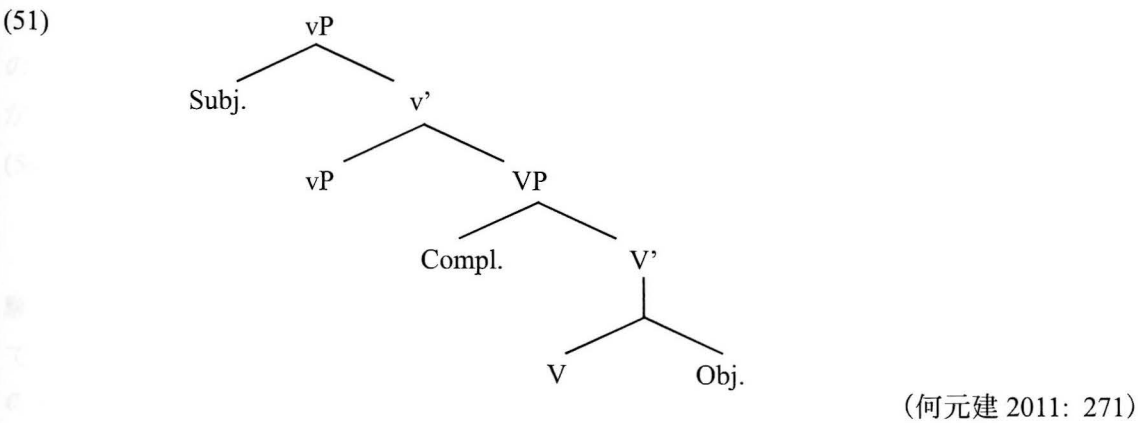
何元建によれば、(46-b) のような一項能格動詞は使役者主語をとれるが対格動詞では不適格文となる。このような性質は V1-V2 複合動詞でも同様であると述べ、次のような例を挙げている。

- (48) a. 这件事使 [张三感动了]。<[ ]内が一項能格動詞>  
 (このことは、張三を感動させた。)  
 b. \*这件事使 [张三批评了]。<[ ]内が対格動詞>  
 (\*このことは、張三を批判させた。) (何元建 2011: 269)

- (49) a. 张三打伤了李四。(張三は李四を殴ってけがをさせた。)  
 → \*张三使[李四打伤了]。<[ ]内が対格の V1-V2 動詞>  
 b. 张三吓呆了李四。(張三は李四を驚かせてぼかんさせた。)  
 → 张三使[李四吓呆了]。<[ ]内が一項能格の V1-V2 動詞> (何元建 2011: 270)

何元建は、対格タイプの V1-V2 動詞について、目的語の意味役割が「対象」か「経験者<sup>14)</sup>」かにより二つの異なる深層構造を持つと述べ、相補分布の構造で示した。

- (50) a. 张三踢破了门。(張三はドアを蹴り破った。)  
 b. 张三踢破了鞋。(張三は(何かを)蹴って靴を破った。) (何元建 2011: 270)



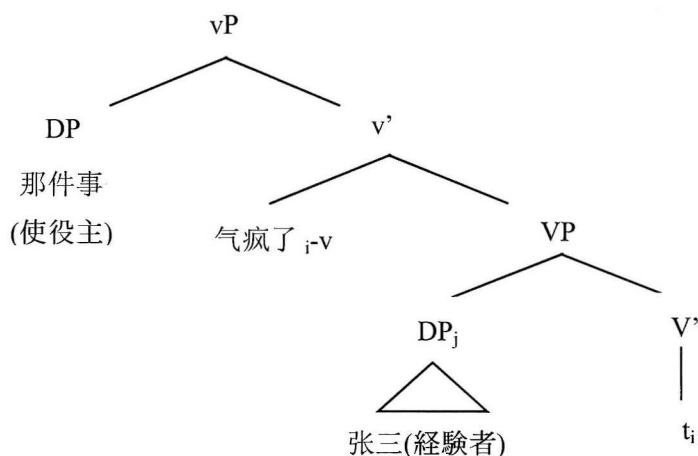
この樹形図のうち、Subj.は主語、Compl.は補語、Obj.は目的語、V は V1-V2 複合動詞、v

は執行軽動詞 (Do-type light verb)<sup>15)</sup> を表わす。執行軽動詞は構造要素で実質の意味はなく、格を付与する能力を持たないとされる。この図は、V が V1-V2 複合動詞のときには、「目的語」と「補語」がどちらか一つしか現れない (=相補分布) ことを表わしている。たとえば、“张三踢破了门”では“门”は目的語の位置に生起し、“他踢破了两只鞋”では“两只鞋”は補語の位置に生起するとされる。

何元建は、対格タイプの V1-V2 動詞は使役義を持たないが、二項能格タイプの V1-V2 動詞は使役義を持つと述べている。この使役義がどこから生じるのかについては、複合形式により使役義を持つという見方を否定し、“让”、“使” 構文と同様に統語形式によると主張した。何元建は、次のような二項能格 V1-V2 文を、音声形式を持たないゼロ形式の使役軽動詞文とし、潜在的使動文<sup>16)</sup> と呼んだ。

(52) 那件事气疯了张三。(あの事は张三を怒らせた。)(何元建 2011: 274)

(53)



(何元建 2011: 274)

この樹形図中の v はゼロ形式の使役軽動詞で、音声形式を持つ軽動詞 (“使”) に対応するため「使役主」の意味役割を付与することができるとしている。また、“张三气疯了李四。”のような二項能格 V1-V2 文は、「張三はそのつもりはなかったが李四を怒らせた」と「張三が故意に李四を怒らせた」の二つの意味があると述べ、以下のように分析している。

(54) a. 张三 气疯了<sub>i-v</sub> [李四 t<sub>j</sub>] (故意でない場合)

b. 张三<sub>j</sub> 气疯了<sub>i-v</sub> [t<sub>j</sub> t<sub>i</sub> 李四] (故意の場合) (何元建 2011: 274)

このうち、“张三”の行為が故意でない場合は、(53) と同じ構造となり、“李四”は「経験者」の意味役割を持つとされる。一方、故意である場合は、“李四”は執行軽動詞句の中で「対象」の意味役割を持ち、“张三”は「動作主」の意味役割を持つが、最終的に文全体の使役軽動詞句の主語位置に移動して「使役主」の意味役割を付与されると分析している (何元建 2011: 276 参照)。

1.3.2.2 Sybesma・沈阳（2006）の分析

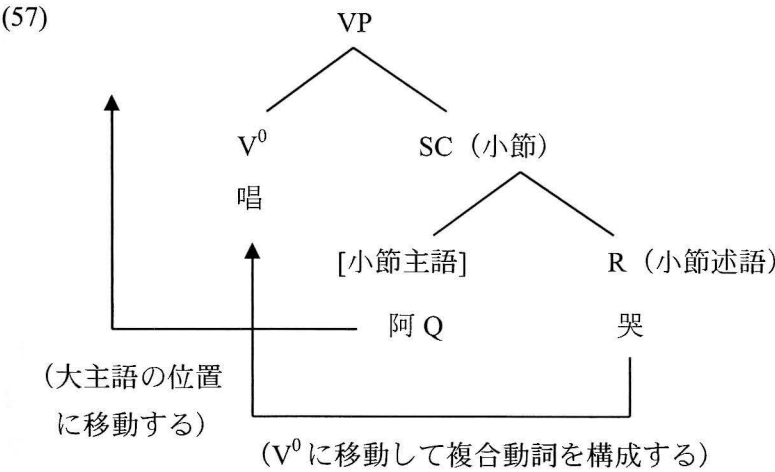
Sybesma・沈阳（2006）は、VR 構造について、Hoekstra の提唱した小節（small clause）理論を取り入れた分析を行った。小節理論の仮説では、VR 構造の主節述語は非状態性の動作行為を表し、この動作は範囲や到達点を持たないが、簡単な主述構造からなる小節を補語にとることで範囲や到達点を持つとされる。つまり、VR 構造の主節動詞は動作を表し、小節はそれによりもたらされた結果を表し、この二つが結合して一つの「動作 - 結果」事態を表す。Sybesma・沈阳は、VR 構造は他動詞的構造と自動詞的構造を持つとしている。自動詞的 VR 構造は、外項（external argument）を持たず、補語として内項（internal argument）のみを持ち、内項は「補語小節」として現れると述べ、次のような例を取り上げている。

(55) 阿 Q 唱哭了。(阿 Q は歌って泣いた。) (Sybesma・沈阳 2006: 40)

この文の主要動詞“唱”は開放性の（動作内部に終点を持たない）動作を表し、同時に“唱”という動作行為が“阿 Q 哭”という結果事態をもたらしているため、基底構造では動詞“唱”は結果を表す補語小節“阿 Q 哭”を伴っているとされる。

(56) 唱[sc 阿 Q 哭]（基底構造） → 阿 Qi [唱[ sc ti 哭]] (Sybesma・沈阳 2006: 40)

小節は、時制<sup>17)</sup>（tense）を持たず完全な文でないため、小節内の各成分は文法上許容される位置に移動すると考えられている。上記の例では、小節の主語“阿 Q”は、大主語の位置に移動して「格（case）」付与され、“哭”は V<sup>0</sup> “唱”の位置に移動し併合して複合動詞（verb compound）“唱哭”となるとされる。



(Sybesma・沈阳 2006: 41)

Sybesma・沈阳は、VR 構文の名詞句 NP の文法的性質について、「小節の主語名詞は小節の述語動詞とのみ統語的、意味的關係を結び、主節の述語とは直接的に関係しない」と主張している。たとえば、この文では、“阿 Q”が動作行為“唱”の主体のように見えるが、“阿 Q”と“唱”は統語構造的にも意味的にも何の関係もないと述べている。その根拠は、この文は以下の文と統語的にも意味的にも同じであるからだと説明している。

(58) 肚子笑疼了。 → 肚子 i [笑[ sc ti 疼了]] (Sybesma・沈阳 2006: 42)

この文では、主語の NP “肚子”は VR の補語“疼”と関係し“肚子疼”という意味を構

成するが、“肚子笑”という意味は構成せず、NP は VR の述語 V と関係しない。

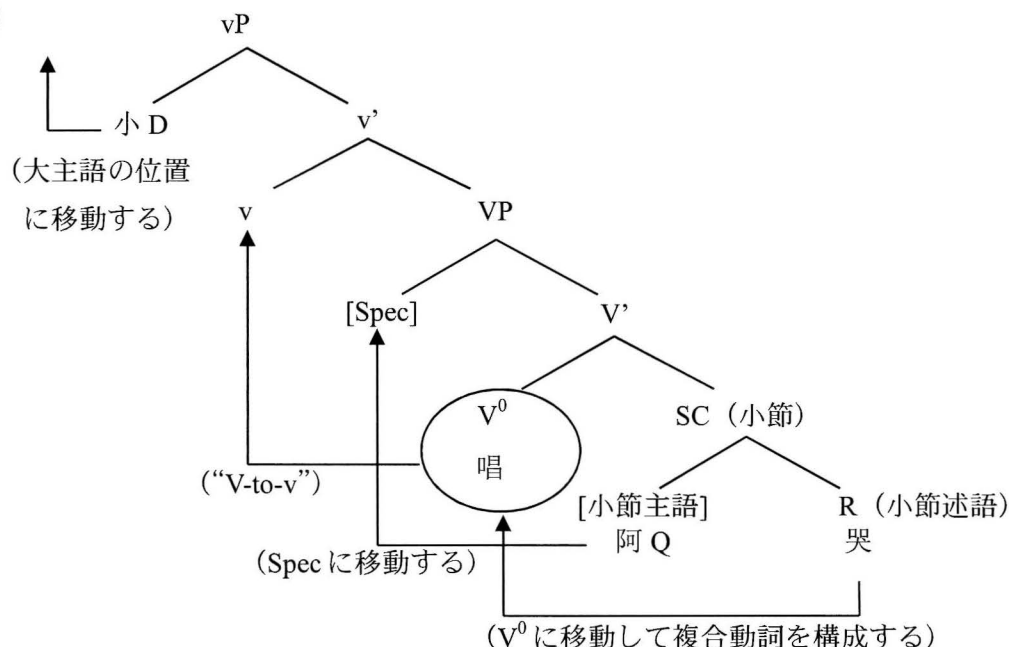
このように、小節理論による分析では、自動詞的 VR 文の主語 NP は小節の主語から移動したものと解釈される（つまり、自動詞的 VR の主語の NP は述語 V の内項ではないとされている）。また、他動詞的 VR 文でも、同様に分析できるとし、次のような例を挙げて生成過程を示した。

(59) a. 小 D 唱哭了阿 Q。（小 D が歌って阿 Q を泣かした。）

b.  $[_{VP} \text{小 D } [_{VP} \text{唱}[_{SC} \text{阿 Q 哭}]]$ （基底構造）

（Sybesma・沈阳 2006: 41）

(60)



（Sybesma・沈阳 2006:41）

この分析では、他動詞的 VR 構造は、自動詞的 VR 構造と異なり、構造中に外部項の  $vP$  (small VP) 階層を持つ<sup>18)</sup>。この階層の機能は  $VP$  (large VP) が表す事態に「原因主」あるいは「使役主」を提供することであるとされる。Sybesma・沈阳は、このような生成過程は、文の主語と小節の主語が「動作主」と「対象」の関係であるように見える次のような他動詞的 VR 構造においても同様であると述べている。

(61) 小 D 打死了阿 Q。（小 D が阿 Q をなぐり殺した。）（Sybesma・沈阳 2006: 42）

Sybesma・沈阳によれば、(59) の“阿 Q”が述語“唱”の目的語でないのと同様に、(61) の“阿 Q”も述語“打”の目的語ではなく、基底構造は次のように分析される。

(62) 小 D  $[_{VP} \text{打}[_{SC} \text{阿 Q 死}]]$

Sybesma・沈阳によれば、(61) “小 D 打死了阿 Q”は、(59) “小 D 唱哭了阿 Q”と同じ構造を持つので、述語“打”は小節の主語“阿 Q”とは統語的、意味的關係をとらない。感覚上“阿 Q”が“打”の「対象」であると感じるのは、「人間の脳の中のある種の百科事典的

知識の連想にすぎない」と述べている。また、他動적 VR 文の主語の NP は、vP の Spec の位置に生成されるので、統語的、意味的には述語動詞 V の「動作主」ではなく「原因主」あるいは「使役主」とあるとしている。たとえば、“小 D 唱哭了阿 Q”において“小 D”は、“唱”の「動作主」ではなく、“唱”が引き起こす出来事の「原因主」あるいは「使役主」と位置付けられている。Sybesma・沈阳は、そのことをより明白に示す例として次のような例文を挙げている。

(63) a. 这篇文章写酸了我的手。(この文章は、書くことで私の手を疲れさせた。)

b. 这首歌唱哭了阿 Q。(この歌は、歌うことで阿 Q を泣かした。)

(Sybesma・沈阳 2006: 42)

上記の文の主語“这篇文章”と“这首歌”は明らかに、動詞“写”や“唱”の「動作主」ではない。小節理論による分析では、これらの文と“小 D 唱哭了阿 Q”は構造的、意味的に同じであると捉えられている。また、“阿 Q 唱哭了”のような自動詞的 VR は、主要動詞と内項である補部小節から構成され外項を持たないので、表層構造上の主語は、次のように内項の小節の主語が移動して生成されたものとされている。

(64) 唱<sub>[sc 阿 Q 哭]</sub> → 阿 Qi<sub>[唱<sub>[sc ti 哭]]</sub> (= (56))</sub>

### 1.3.2.3 本論の捉え方

何元建 (2011) は、使役義を持つ VR を二項能格に限定し、二項対格は使役義を持たないとしているが、本論では両者とも使役義を持つと捉える。たとえば、前述の二項対格の例文“他哭湿了手帕。”、“他踢破了门。”は、それぞれ「彼が泣いて、(それにより) ハンカチが濡れるという状態にさせた」、「彼がドアを蹴り、(それにより) ドアが破れるという状態にさせた」という意味内容を含み、使役義を持つ。これらが“\*他使手帕哭湿了”、“\*他使门踢破了”のように“使”構文に言い換えられないのは、“使”構文の文法的制約のためである。“使”構文や兼語文の第二動詞は、“使”や第一動詞の後の名詞句の行為や状態を叙述していなければならず、“哭湿”のような主語の動作行為を含む動詞をこの位置に置くことができないため、“\*他使手帕哭湿了”は許容されない。このことから、“使”構文に変換できるか否かで VR の使役義の有無を決定することは妥当でないと考える。

Sybesma・沈阳 (2006) の小節理論は、2 項分岐の統語的生成の中で VR 構造の結果補語の主体 (小節理論では小節の主語) が表層構造の VR の目的語の位置に現れることを合理的に説明している。しかし、この分析では、“小 D 打死了阿 Q。”は、生成過程のどの段階においても“小 D”と“阿 Q”の間に“打”という意味関係が生起しえない。“小 D が阿 Q を叩く”という命題は少なくとも意味上では存在していなければならない。また、Sybesma・沈阳は“肚子笑疼了”と“阿 Q 唱哭了”を同じ構造と分析しているが、本論では“肚子笑疼了”は他動型 VR の目的語“肚子”が話題化されているもので、自動型 VR の“阿 Q 唱哭了”とは異なる構造であると考ええる。



## 1.4 “得”構文、“把”構文の研究

### 1.4.1 李臨定(2011)の研究

李臨定(2011)は、“得”を使った文のうち、「(N)+V+得+N<sub>0</sub>+V…」の文型、すなわち“V得”の後に「N<sub>0</sub>」(対象)を伴う“得”構文は使役性を持つと述べている(李臨定 2011:328)。ここで注意しなければならないのは、第一に「N<sub>0</sub>」が前方の動詞 V の目的語ではなくこの文の述語を構成する「V 得+V」の目的語であるとしている点である。その根拠として、もし「N<sub>0</sub>」が前方の動詞 V の目的語であるならば、N と N<sub>0</sub> の関係は常に、〈動作主, 対象〉の関係でなければならないが、実際には以下のような七つのパターンが存在するからであると述べている。前方の名詞成分を N<sub>1</sub>、後方の名詞成分を N<sub>2</sub> とし、それらと V の意味関係を〈 $\theta_1$ ,  $\theta_2$ 〉で示す。

(65) a. 痛苦折磨的他吃不好饭, 睡不好觉 <動作主, 対象>

(苦痛が彼を苛み、ご飯を十分食べられず、十分に眠れなくさせた)

b. 有时(她)还整夜的哭, 哭得长富也忍不住生气 <動作主, 非動作主/非対象>

(時には(彼女は)一晩中泣き、長富に怒りを堪えきれなくさせた)

c. 豌豆吃得人腿发软, 心发躁, 好多人都拉了肚子 <対象, 動作主>

(エンドウ豆を食べて、皆は足の力が抜け、心が苛立ち、多くの人が下痢をした)

d. 这句话又说得大家笑起来 <対象, 非動作主/非対象物>

(この言葉を言うと、また皆は笑い出した)

e. 三个青年人…故意跑在前边不让五嫂追上, 累得五嫂直喘气 <(N1=文), 動作主>

(三人の青年は…わざと前を走って兄嫁を追いつかせないようにして、兄嫁が疲れて息をきらすようにさせた)

f. 他急得缩脖子, 皱眉, 掀鼻子, 咧嘴, 简直难看透了, 惹得大家哈哈大笑

<(N1=文), 対象>

(彼は焦って首を縮め、眉をしかめ、鼻を剃り上げ、口を横に引き、まったくぶざままで、皆を大笑いさせた)

g. 村子里, 更是漫天的云雾, 说得她不像个人 < $\phi$ , 非動作主/非対象>

(村中に、さらにうわさが広がり、それにより彼女を見るかげもなくさせた)

(李臨定 2011:320-323)

李臨定によれば、これらの文はすべて“把”構文に書き換えることができ、そのことから N<sub>2</sub> は文の述語を構成する「V<sub>1</sub> (得) + V<sub>2</sub>」の目的語であることがわかるとしている。さらに、第二の重要な指摘は、この「V<sub>1</sub> (得) + V<sub>2</sub>」は「動詞+補語」構造であると述べていることである。李臨定によれば、動補構造文は一般に“得”構文に拡張でき、“笑得肚子都疼了”のような「V 得」の後に「N<sub>0</sub>」を伴う“得”構文も動補構造文“笑疼了肚子”の拡張と捉えられる。



#### 1.4.2 松村（2011）の研究

松村は講義（2011）の中で、“痛苦折磨的他吃不好饭，睡不好觉”（苦痛が彼を苛み、ご飯を十分食べられず、十分に眠れなくさせた）について、形式意味論の立場から論理式を用いて分析した。松村によれば、この文は“痛苦折磨她”、“痛苦让他吃不好饭，睡不好觉”、“他吃不好饭，睡不好觉”の命題内容を含み、それぞれ「原因となる命題表現」、「使役関係の命題表現」、「結果の命題表現」を表すという。そして、文全体の意味はこれらすべてを包含しなければならない。これらのことを述語論理と埋め込みを用いて以下のように表記した。

(66) 痛苦折磨的他吃不好饭，睡不好觉。

(67) 得'[折磨'(痛苦，他)，他，吃不好'(他，饭)&睡不好'(他，觉)]

サレ ～ガ ～ニ ～コヲ

このように松村は、“得”構文のうち、“得”の直後に名詞を伴う文が使役の意味をもつことを論理式で示した。この式は、「得'」を使役関数とする三項関数である。

また、松村は、前置詞“把”は動詞との意味関係を「間接表示」とすると同時に文全体における[処置]の意味を表すが、“把”構文は「～ガ～ニ～コトヲモタラス」と意味解釈することができ、広い意味で[授与]を表すので、以下のような論理式で表すことができると述べた。

(68) 把' (  $\alpha$ ,  $\beta$ ,  $\gamma$  )

モタス ～ガ～ニ ～コヲ

松村は、“把”構文の動詞句の意味上の制約のうち、結果補語が生起する文として以下のような例を挙げ、論理式で表記した。

(69) 把瓶子灌满。（瓶に注いでいっぱいにした。）（松村訳）

(70) 把'{ $\phi$ , 瓶子, 灌'( $\phi$ , 瓶子)&满'(瓶子)}

モタス ～ガ～ニ ～コヲ

このように松村は“把”を「授与関数」と捉え、“把”構文を「～ガ～ニ～コトヲモタラス」という意味構造を持つ3項関数であるという考えを示した。

#### 1.4.3 本論の捉え方

李临定（2011）、松村（2011）が指摘するように一部の“得”構文は使役義を持つ。本論では、このような“得”構文はVRの拡張と捉えられるという李临定の主張を基に、使役義を持つ“得”構文をVRの論理構造を基盤とする構造として捉える。また、“把”を使役標識とする主張（熊仲儒 2004 など）もあるが、本論では“把”は広い意味で[授与]を表すとする松村の考えを支持し、“把”を「授与関数」と捉える。“得”、“把”については、これらが3項関数の論理構造を構成するとした松村の分析を参考とした。具体的な分析については、以降の章で述べる。

## 1.5 本章の結び

本章では、中国語の使役概念と形式の問題、および各使役形式について統語論的、意味論的に論じている先行研究の中から、本論の分析において参考とした研究を取り上げた。使役概念については、范晓（2000）、熊仲儒（2004）の研究を概観し、本論の考え方を述べた。中国語の“让”、“使”構文の述語論理による記述については、温琳（2008）の分析を参考としたが、本論では使役文の論理構造の表記として談話概念を導入して拡張した述語論理を用いることを述べた。論理式についての詳しい説明およびこれを用いた例文の分析は次章以降で行う。VRの派生および類型については、生成文法理論に基づく研究からさまざまな見解が提示されており、その中から何元建（2011）とSybesma・沈阳（2006）を取り上げ、両者の分析で本論と関係する部分を紹介し、本論の見解との違いを述べた。また、あるタイプの“得”構文は使役義を持つが、“得”構文がVRの拡張であるとする李临定（2011）の見解から、“得”構文とVRを統一的に捉えることができるという着想を得た。“把”構文については、本論では“把”を[授与]関数と捉える松村（2011）の見解を支持する。

### （注）

- <sup>1)</sup> 范晓（2000: 137）は、 $S_1$ は「主述構造+使+主述構造」の形式以外に①省略または一部が潜在化②主述構造の名詞化（修飾構造）③名詞自身が事態を指示④ $S_1$ の動詞中心構造の一部が $S_2$ に融合している形式で現れることがあると述べ、次のような例を挙げている。
  - (1) 天气使他头脑昏昏。(①“天气[V]”→Vを省略)
  - (2) 母亲的微笑使孩子感到温暖。(②主述構造→修飾構造)
  - (3) (小扬有赌博恶习,)这件事使她十分痛苦。(③“这件事”=小扬有赌博恶习)
  - (4) 寒风吹醒了她的头脑。(④“寒风吹来使她的头脑醒了。”の $S_1$ の述語“吹”が $S_2$ の述語に融合)
- <sup>2)</sup> 原文の“兼格”をそのまま用いた（范晓 2000: 139）。複数の意味役割（あるいは深層格）を兼ねると言う意味を表す。
- <sup>3)</sup> 使動文は、“感动”、“健全”、“恶化”など「使動」の意味を持つ動詞を用いた文で、対象に動詞が表す動作行為あるいは性質状態を発生させるという意味を表す。范晓は、使動文は“使”構文に変換できるため、明示的使役文と見なせると述べている。

例) 这个措施方便了群众。→这个措施使群众方便了。
- <sup>4)</sup> 范晓は兼語文を“使令句”と呼んでいる。范晓は“使令句”の「 $N_1+V_1+N_2+V_2$ 」構造の $N_2$ を統語上で目的語が主語を兼ねる「兼語」ではなく、意味上で対象が主体を兼ねる「兼格」と捉えている。
- <sup>5)</sup> 朱德熙は「述連構造」（“连谓结构”）について、「述語」（“谓语”）の連続構造ではなく、「述詞」（“谓词”）あるいは「述詞構造」（“谓词结构”）の連続構造であると述べている。朱德熙は述詞を動詞・形容詞と定義しているので、この述連構造は動詞・形容詞（あるいは動詞性構造）の連続構造と捉えられる。なお、“连谓结构”に当てた日本語訳「述連構造」は、朱德熙（1982）の訳書である『文法講義』（杉村博文・木村英樹訳,1995:214）に従った。
- <sup>6)</sup> 日本語訳は、温琳（2008）を引用。北京日本語学研究中心のコーパスから引用と注記。
- <sup>7)</sup> 日本語訳は、温琳（2008）を引用。北京日本語学研究中心のコーパスから引用と注記。

- <sup>8)</sup> Shibatani (1976) は、“The Grammar of Causative Construction”において、使役は二つの事態 (event) の次のような関係を指すと定義している。
- a. 二つの事態の関係について、話者が、結果事態 (caused event) の発生時間 ( $t_2$ ) は原因事態 (causing event) の発生時間 ( $t_1$ ) よりも後であると信じている。
  - b. 二つの事態の関係について、話者が、結果事態の発生は原因事態の発生に完全に依存していると信じている。つまり話者は、原因事態が起きなければ結果事態はその時に起きなかっただろうという反事実的推論を受け入れている。
- <sup>9)</sup> Chao (1968) は、複合語を、二つ以上の語 (あるいは語素) が緊密に組み合わせたり一つの語を形成しているものと定義している。Chao によれば、複合語は成分の機能的な側面から、主述 (S-P) 複合語、並列複合語、主従複合語、動目 (V-O) 複合語、動補 (V-R) 複合語、複雑な複合語に下位分類される。
- <sup>10)</sup> Chao (1968: 438-441) は、V-R 複合語の結果補語は、“你把画儿挂歪了”や“再等一个钟头就等腻了”のように通常完了の接尾辞“了”を伴うが、次のような制約のもとでは、“了”は用いられないと述べている。①否定 (Negatives)、②持続 (Progressives)、③不定の過去 (Indefinite past)、④命令 (Commands)、⑤方向補語 (Directional Complements)、⑥可能補語 (Potential Complements)、⑦連体修飾語の V-R 複合語 (Attribute V-R Compounds)、⑧評価形式 (Considered Forms)、⑨引用形式 (Quoted Forms)。
- <sup>11)</sup> “吃的太饱”の“的”(=“得”)は、文法的には動作や状態の程度を表す程度補語である。Chao は、このような構造中の“的”に後置される成分を“predicative complement”と呼んでいる (355-358 参照)。この解釈によれば、“太饱”は主語部分“吃的”の述語として機能する。
- <sup>12)</sup> 何元建 (2011: 263) 参照。
- <sup>13)</sup> Shimpson, J. (1983) が提唱した規則。
- <sup>14)</sup> 原文では“当事”。
- <sup>15)</sup> 軽動詞 (light verb) は Chomsky のミニマリスト・プログラム (Minimalist Program) で導入された抽象的な接辞的動詞で、VP の上層に生起する (何元建 2011: 199 参照)。
- <sup>16)</sup> 潜在的使動文 (原文は“隐形使动句”) に対し、明示的使動文 (原文は“显性使动句”) は、“那件事使张三气疯了。”のような文とされている ((何元建 2011: 274)。
- <sup>17)</sup> 原文では“时态” (tense) を用いているが、「時制」と訳した。本論の「時態」 (aspect) の概念とは異なるものである。
- <sup>18)</sup> 動詞句が外部の動詞句殻を持つという理論は、VP 殻 (VP-shell) 分析と呼ばれる。VP-shell 分析は、VP は外側の VP 殻 (shell) と内側の VP 殻 (core) に分離投射されるという理論に基づくもので、Larson により提案された (何元建 2011: 217-218 参照)。

## 第2章 分析理論－形式意味論の考え方と方法

### 2.0 はじめに

本章では、本論文の論述の理論的背景である形式意味論の考え方と方法について述べる。形式意味論では、命題論理、述語論理、内包論理（IL）などの形式言語が用いられるが、どのような形式言語（論理言語）を用いるにしても、形式意味論は基本的に「構成性の原理」（the principle of compositionality）に基づいている。第1節では、形式意味論の基本的な考え方を述べ、基礎的な形式言語である命題論理と述語論理を運用してどのように意味を定式化できるかを示す。第2節では、形式意味論における意味規定の方法を、中国語の簡単な文を用いて示す。第3節では中国語の使役構文を用いて、モデル理論的意味解釈のプロセスを記述する。第4節では、以降の章で用いる論理式について述べる。本論では使役構文の基本的構造を「～ガ～ニ～ヲサセル」という3項関数として捉え、“让”構文を「让」（ $\alpha, \beta, \gamma$ ）のように記述する。論理構造の表記は、一般的な一階述語論理に「談話概念」、「意味役割」、「時相」の概念を導入して拡張している。本章では、拡張の根拠とする理論的背景について概説し、論理式との関連を述べる。

### 2.1 形式意味論の基本的な考え方

形式意味論とは、自然言語を厳密に規定された論理的手法に基づき記述し、自然言語の仕組みを解明しようとする現代意味論の立場である。形式意味論の直接の源は、モンタギューの意味論（*Formal Philosophy*, 1974）に遡る。形式意味論においては、一般的に自然言語の文（または部分表現）を形式言語に翻訳し、その言語に対し意味解釈することで自然言語の意味を規定するという方法が採られる。用いる形式言語（論理言語）には、単純な言語から拡張された複雑な言語まで段階がある。本節では、基礎的な言語である「命題論理」と「述語論理」について説明する。

#### 2.1.1 命題とは何か

まず、命題とは何かを述べておこう。自然言語の文は、世界について何らかの状況を述べている。しかし、ある一つの言語が異なる表現で同じ状況を記述していることもある。

(1) a. John and Mary are students.

b. Mary and John are students.

(杉本 1998: 70)

また、同じ文が異なる状況を表す場合もある。

(2) The chicken is ready to eat.

a. The chicken is ready for us to eat something.

b. The chicken is ready to eat something.

(杉本 1998:16)

これらの文が述べている状況を、論理学では「命題」（proposition）と呼ぶ。上述のよう

に、文と命題の関係は、異なる文が同じ命題を表すこともあれば、一つの文が二つの命題を持つこともある。つまり、命題を文の意味と捉えることができる。

### 2.1.2 命題論理

次に、「命題論理」(propositional logic) について説明しよう。命題論理は、命題と命題の論理的関係を扱う。命題論理では、命題の内容には立ち入らず、「命題がどのような条件 (= 真理条件 (truth conditions) で真となるか」や「妥当な推論とは何か」が問題とされる。そのため、文 (または命題) は、変項 (= 命題変項 (propositional variable) として  $p$ ,  $q$  などの記号で表される。文と文の関係は文 (または命題) 結合子 (sentential (or propositional) connectives)<sup>1)</sup> によって決定される。通常用いられる結合子は、連言 (conjunction, かつ; and)、選言 (disjunction, または; or)、含意 (implication, もし…ならば; if…then)、同値 (equivalence, もし…ならばかつそのときに限り; if and only if) である。また、一つの命題に働く否定 (negation, …でない; not) が用いられる。これらの表記には、「&」、「 $\vee$ 」、「 $\rightarrow$ 」、「 $\Leftrightarrow$ 」、「 $\neg$ 」などの記号が使われる。

### 2.1.3 真理条件的意味論

それでは、具体的に命題論理においてどのように意味が規定されるのかを見てみよう。例として、英語の and で結ばれた文を取り上げる。

(3) John is a student and Mary is a teacher. (杉本 1998: 71)

この文の意味を知るとは、個々の文 “John is a student” と “Mary is a teacher” が現実においてどのような状況にあるかを知ることであるといえる。つまり、この命題がどのような真理条件で真となるのかを知ることである。より一般化するために、個々の命題を命題変項 (propositional variable)  $p$  と  $q$  で記述し、“and” を記号「&」を用いて記述しよう。「&」で結ばれた等位形式は「連言」と呼ばれる。

(4)  $p \& q$

(4) の命題に対して、その真理条件は次のように記述できる。

(5) 命題  $p \& q$  は、 $p$  と  $q$  が同時に真であれば真、それ以外は偽となる。 (杉本 1998: 72)

(3) の文は、ジョンが学生であり、メアリーが先生であるという状況を表わしていて、このうちどちらかが成立しなければこの文を用いることができない。したがって、(5) は確かに (3) の文が表している世界の在り方を捉えているといえる。

また、(5) の真理条件は、次のような真理値表 (truth-table) を用いて表すことができる。

(6)

| p | q | p&q |
|---|---|-----|
| 1 | 1 | 1   |
| 1 | 0 | 0   |
| 0 | 1 | 0   |
| 0 | 0 | 0   |

(杉本 1998: 73)

この表の 1、0 の数字は命題の値であり、1 が真、0 が偽を表す。それぞれの命題の組み合わせに従って命題  $p \& q$  の真理値が規定されている。この真理値表の表していることは(5)の真理条件と同じであり、 $p$  と  $q$  が共に真であるときに真となり、それ以外は偽となる。このように、命題論理における意味解釈は、真理条件によって規定できる。

命題と命題の論理関係には、前述の「連言」の他に「選言」( $\vee$ )、「含意」( $\rightarrow$ )、「否定」( $\neg$ )がある。それぞれの真理条件は次のとおりである。

(7)命題  $p \vee q$  は、命題  $p$  と  $q$  が同時に偽であれば偽で、それ以外は真となる。

(8)命題  $p \rightarrow q$  は、命題  $p$  が偽であるか、命題  $q$  が真である時に真で、それ以外は偽となる。

(9)命題  $\neg p$  は、命題  $p$  が偽の時に真で、それ以外は偽となる。

2.1.4 述語論理

命題論理が、命題間の論理関係を扱う言語であったのに対し、「述語論理」(predicate logic)は、文の中味、すなわち命題の内部構造を扱う言語である。たとえば、次の文を例に説明しよう。

(10) a. John walks.

b. John loves Mary.

これらの文は、述語論理では次のように表現される。

(11) a. walk'(j)

b. love' (j,m)

述語論理の表現では、一般的に個体定項 (individual constants) にはアルファベットの小文字が用いられ、述語 (predicate) には自然言語の表現に「'」(プライム)を付した表現が用いられる。上記の表現式に、個体定項ではなく個体変項 (individual variable) を用いると次のように表現できる。

(12) a. walk'(x)

b. love' (x,y)

個体定項と個体変項を合わせて、個体名辞 (individual terms) と呼ぶ。述語論理では、個体名辞は述語の項 (argument) と呼ばれ、命題は述語とその項が満たされることを要求している項の組み合わせとして表現される。述語が満たされていることを要求している項の数

は述語によって異なり、それぞれ 1 項述語、2 項述語、3 項述語のように呼ばれる。このような述語と項の論理関係は、述語名辞 (predicate terms) を  $P$ 、個体名辞を  $t$  で表すと次のように一般化できる<sup>2)</sup>。

(13)  $P(t_1, t_2 \dots t_n)$   $n$ -項述語

ただし、自然言語の述語は、一般に 3 項述語までとされる。英語の例文で示すと、(14) の文はそれぞれ (15) のように表現できる。

(14) a. John walks.

b. Mary kisses George.

c. John introduces Mary to Paul.

(杉本 1998: 113)

(15) a. walk'(j)  $\dots$  1 項述語

b. kiss'(m, j)  $\dots$  2 項述語

c. introduce'(j, m, p)  $\dots$  3 項述語

(杉本 1998: 113)

### 2.1.5 構成性の原理

形式意味論は、どのような形式言語 (論理言語) を用いるにしても、基本的には「構成性の原理」 (the Principle of Compositionality) に基づいている。この原理は、真理条件的意味論における意味規定の基盤となる考え方で、「フレーゲの原理」 (Frege's Principle) とも呼ばれる。構成性の原理は、次のような原理である。

(16) ある表現全体の意味は、その表現を構成する部分の意味とそれら部分の結合様式のみから決定できる。  
(杉本 1998: 132)

形式意味論において仲介言語として用いられる命題論理や述語論理の意味解釈は、この構成性の原理に基づいている。たとえば、次のような簡単な形式言語の表現を例に説明しよう。

(17) a. A & B

b. walk'(j) (杉本 1998: 132)

あるモデルにおける (17a) の複合命題の全体の意味は、構成部分である命題 A と命題 B の真理値とそれらが連言「&」で結ばれているという結合様式から決定できる。また、(17b) の述語論理「walk'(j)」の意味は、構成部分である「walk'」と「j」の指示対象 (すなわち、個体の集合とジョンという個体) と、これらが主述関係にあるという結合様式から決定できる。

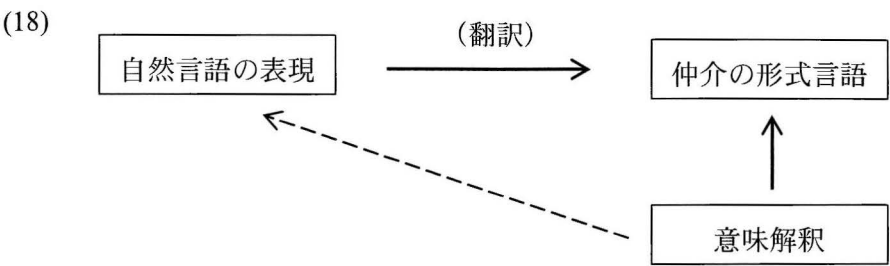
### 2.2 形式意味論の方法

本節では、形式意味論の基本的な枠組みについて概観し、意味の規定がどのようになされるのかを述べる。



2.2.1 形式意味論の枠組み

命題論理において意味解釈がどのようになされるかはすでに簡単に述べたが、形式意味論では仲介の形式言語にどのような言語を用いるにしても、自然言語の意味解釈は次のような方法でなされる。



形式意味論において自然言語の意味解釈は、自然言語の表現が一旦仲介の形式言語の表現に翻訳され、その形式言語の表現に対して意味解釈が与えられ、それをもって自然言語の意味解釈とするという方法で行われる。仲介の形式言語には、命題論理や述語論理の他に、拡張された複雑な論理言語も用いられるが、ここでは基礎的な命題論理と述語論理を用いて形式意味論における意味解釈がどのようになされるのかについて説明する。

2.2.2 意味解釈とモデル

命題論理の意味解釈で述べたように、自然言語の文の意味解釈は、その文がどのような条件のもとで真になるかという真理条件として規定される。真理条件を記述し、その真偽を決定するためには、その作業に必要な情報が必要になる。そこで用いられるのがモデル (model) である。たとえば、“John walks” のような文の意味解釈を行う際に必要となるのは次のようなモデルである。

(19) 意味解釈モデル M

$M = \langle A, W, T, F \rangle$

A=個体の集合 {ジョン,メアリー,ポール…}

W=可能世界の集合 {w1,w2,w3…}

T=真理値の集合 {1,0}

F=基本表現 {j,m,p,walk',kiss',introduce' …}

2.2.3 「可能世界」

ここで、モデル中の「可能世界」(possible world) について説明しよう。前述の文“John walks” が表す状況は、次のような真理条件として記述できる。

(20) j の指示対象 (=ジョンという個体) が walk' の指示対象 (=歩く個体の集合) のメンバーである時に真であり、それ以外の場合は偽である。

この真理条件の真偽を決定するためには、いま問題とされている状況が現実の世界に存在するかどうかという情報が必要となる。仮に、歩いている個体が次のような状況にある 3